

美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

興道寺廢寺（第2次～第8次調査）

高善庵遺跡

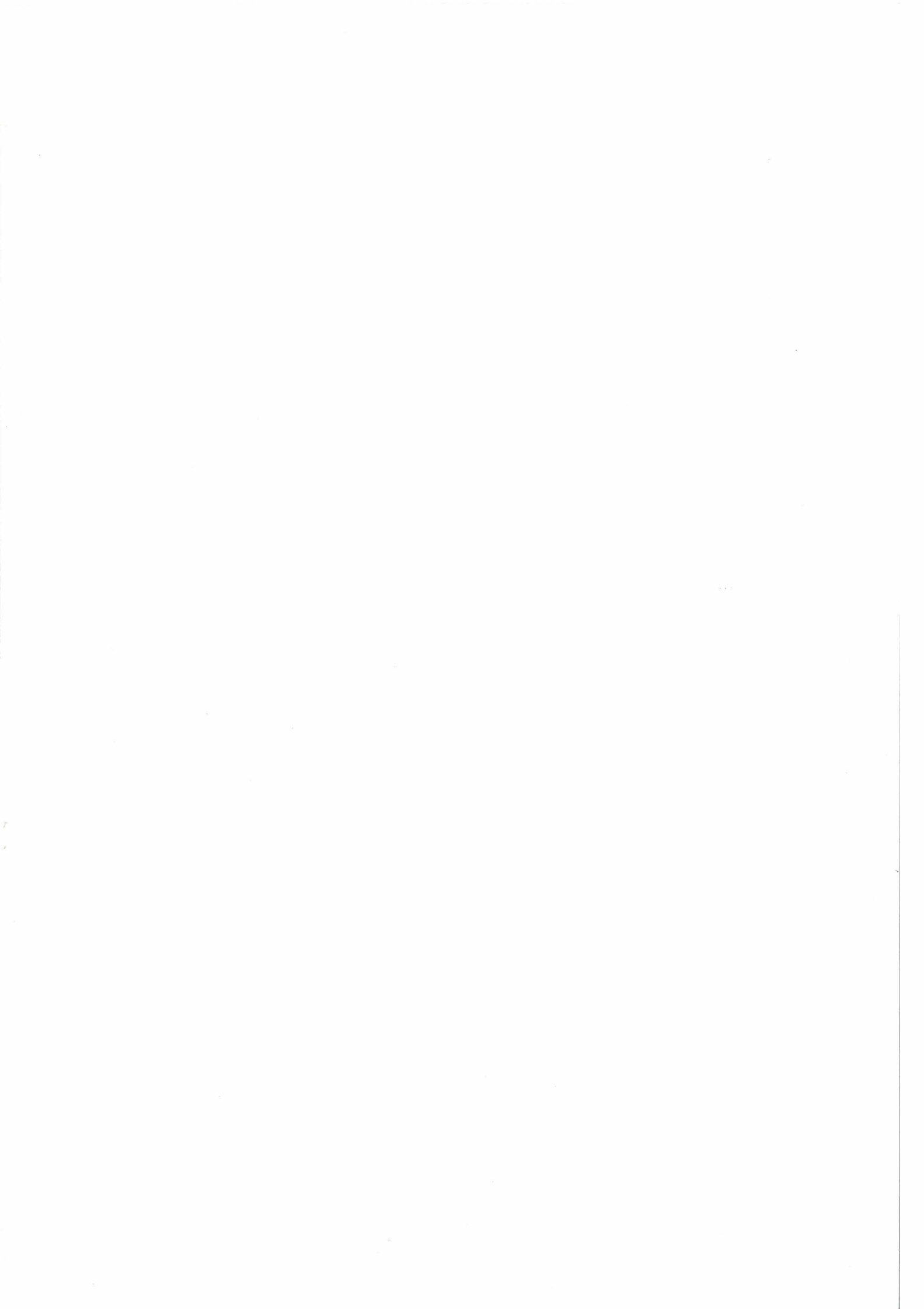
浄土寺古墳群

今市遺跡

毛ノ鼻遺跡

2007

美浜町教育委員会





興道寺廃寺基壇遺構1 西辺瓦溜まり (第2次調査2トレンチ)



興道寺廃寺基壇遺構2 基壇版築 (第6次調査2トレンチ)



興道寺廃寺基壇遺構2 東辺瓦溜まり (第6次調査2トレンチ)



興道寺廃寺基壇遺構2 西辺瓦溜まり (第6次調査3トレンチ)



興道寺廃寺基壇遺構3 (第8次調査3トレンチ)



興道寺廃寺出土軒瓦



浄土寺2号墳



浄土寺2号墳横穴式石室



浄土寺3号墳



浄土寺3号墳横穴式石室

例 言

- 1 本書は、美浜町内に所在する興道寺廃寺、高善庵遺跡、浄土寺古墳群（浄土寺跡・阿弥陀寺古墳群・北田東禅寺裏古墳群を含む）、今市遺跡、毛ノ鼻遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は文化庁補助金（平成 15～18 年度）、福井県教育委員会補助金（平成 15・16 年度）の交付を受けて美浜町教育委員会が主体となって実施した。現地調査は平成 15 年度から平成 18 年度までの 4 ケ年間にわたって実施し、整理作業を随時、併行して進めた。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体者	浅妻 保	（美浜町教育委員会教育長）
調査事務局	田辺義郎	（美浜町教育委員会事務局長、平成 15・16 年度）
	東田仁幸	（美浜町教育委員会事務局長、平成 17・18 年度）
		（美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室長、平成 15・16 年度）
	塩浜洋一	（美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室長、平成 17・18 年度）
	松葉竜司	（美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室学芸員）
	大野康弘	（美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室学芸員）
調査担当者	松葉竜司	
調査作業員		
		（平成 15 年度）
		秋山喜久枝、上野山稔、久保正、小林三雄、柴田文恵、田村千賀子、田辺渉、道幸明、福山博章、丸杉美和、由田尚道、吉本正治
		（平成 16 年度）
		芦田泰範、阿部優美、伊藤キヨ子、上野山稔、久保正、具志堅有紀、沢田三郎、鹿本直子、田辺渉、道幸明、原田吉雄、福山博章、丸杉美和、道下匠、山口遥介、吉本正治
		（平成 17 年度）
		秋山喜久枝、伊藤キヨ子、上野山稔、久保正、具志堅有紀、小林裕季、沢田三郎、沢田道子、高口博志、竹阪卓、田中悟、田辺渉、道幸明、成尾佐知子、原田吉雄、福山博章、松田健一郎、道下匠、山口遥介、由田尚道、吉本正治
		（平成 18 年度）
		秋山喜久枝、伊藤キヨ子、上野山稔、奥井新平、久保正、小林裕季、沢田三郎、沢田道子、竹阪卓、田中悟、田辺渉、道幸明、西森啓詞、原田吉雄、道下匠、山口遥介、吉本正治
- 4 現地調査は松葉が担当した。
- 5 調査遺跡の本書への収録は遺跡毎とし、必ずしも調査年次順とはしていない。
- 6 遺物実測図の縮尺は瓦：1/5、土器・鉄製品：1/3（浄土寺古墳群出土鉄製品 1/2）、玉：1/2 とした。図中の遺物断面は須恵器を黒塗り、その他の遺物を白抜きとした。
- 7 本書の執筆、図版作成等は松葉、山口遥介、小林裕季（奈良大学）が分担して行った。山口、小林の執筆箇所は以下のとおりである。編集は松葉が行った。

山口遥介：第4章第4節（出土遺物の部分）、同章第5節第1・2項（本人の記述に則して松葉が
改変）、同章第5節第3項、第6節第1・2項（本人の記述に則して松葉が改変）、同章
第6節第3項、同章第7節第1～3項（本人の記述に則して松葉が改変）、同章第7節
第4項、同章第9節第1項（石室の部分）、同章第10節第3項

小林裕季：第2章第5～11節（出土土器・鉄製品の部分）、同章第12節第2項（瓦叩き目の部分）
同章第12節第3項

8 現地調査では下記の土地所有者の御理解、御協力を賜った。（敬称略）

興道寺廃寺

奥井千代乃、奥井義弘、西島清美（第2次調査）、田村泰三、田村正美、藪ノ内正和（第3次調査）、
井上ハルミ、澤田政一、奥井義弘、堀田みち子、鳥居秀樹（第4次調査）、馬野一司（第5次調査）、
奥井精次、久保豊吉、澤田宣子、柴田鈴子、南眞琴（第6次調査）、奥井義弘、河井久利、
軍場保幸、久保豊吉、鳥居辰雄（第7次調査）、奥井義弘、木村誠一、高木茂（第8次調査）

浄土寺古墳群

関西電力株式会社、丹生生産森林組合、大西厚

高善庵遺跡

澤田茂次、澤田要一、木村清和、木村毅

今市遺跡

辻原正男

毛ノ鼻遺跡

尾上久一

9 現地調査・報告書作成で下記の機関・個人に御指導、御協力を賜った。なお、調査遺跡を素材として
開催した美浜町歴史シンポジウムに招聘したパネリスト諸氏にはシンポジウムなどを通じて遺跡の評
価などに関する有益な御指導、御助言を賜った。（敬称略）

福井県教育庁文化課文化財保護室、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史民俗
資料館、福井県立歴史博物館、若狭考古学研究会

赤澤徳明、安倍義治、網谷克彦、諫早直人、伊藤雅文、入江文敏、植野浩三、上野晃、榎村寛之、
尾上実、加藤克郎、川村俊彦、櫛部正典、葛原秀雄、工藤俊樹、久保智康、蔵富士寛、坂井秀弥、
栄原永遠男、佐藤優子、芝田寿朗、白井忠雄、白石太一郎、田代弘、橘惠慶、田辺常博、玉田芳英、
玉村幸一、故大同芳男、土井孝則、中川佳三、永井久美男、永江寿夫、中島正、中司照世、
中西和彦、中西昭二、西島伸彦、仁科章、西野喜代二、畠中清隆、馬場基、菱田哲郎、二村陽子、
古川登、松川雅弘、松本達也、水野和雄、御嶽貞義、森川治、森本輝久、山口悦子、山口充、
山中章、吉岡泰英

10 出土遺物・記録類は美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室（平成19年3月31日現在）が
保管している。

目 次

卷頭図版

例 言	i・ii
目 次	iii・iv

第1章 美浜町の諸環境	1
第1節 美浜町の地理的環境	1
第2節 美浜町の歴史的環境	4

第2章 興道寺廃寺（第2～8次調査）	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 既往の調査	8
第3節 調査の経緯、経過および方法	12
第4節 興道寺廃寺第1次調査の確認	14
第5節 興道寺廃寺第2次調査	15
第6節 興道寺廃寺第3次調査	43
第7節 興道寺廃寺第4次調査	47
第8節 興道寺廃寺第5次調査	71
第9節 興道寺廃寺第6次調査	74
第10節 興道寺廃寺第7次調査	110
第11節 興道寺廃寺第8次調査	124
第12節 小結	138

第3章 高善庵遺跡	165
第1節 遺跡の概要	165
第2節 調査の経緯、経過および方法	165
第3節 基本層序	166
第4節 遺構・遺物	168
第5節 小結	168

第4章 浄土寺古墳群	169
第1節 遺跡の概要	169
第2節 既往の調査	170
第3節 調査の経緯、経過および方法	170
第4節 浄土寺1号墳	176
第5節 浄土寺2号墳	178
第6節 浄土寺3号墳	186
第7節 浄土寺古墳群内のその他の調査	193
第8節 浄土寺跡	195
第9節 浄土寺古墳群周辺分布調査	197
第10節 小結	201
第5章 今市遺跡	209
第1節 遺跡の概要	209
第2節 調査の経緯、経過および方法	210
第3節 基本層序	210
第4節 遺構・遺物	211
第5節 小結	214
第6章 毛ノ鼻遺跡	215
第1節 遺跡の概要	215
第2節 調査の経緯、経過および方法	215
第3節 基本層序	216
第4節 遺構・遺物	216
第5節 小結	216

写真図版

報告書抄録

第1章 美浜町の諸環境

第1節 美浜町の地理的環境

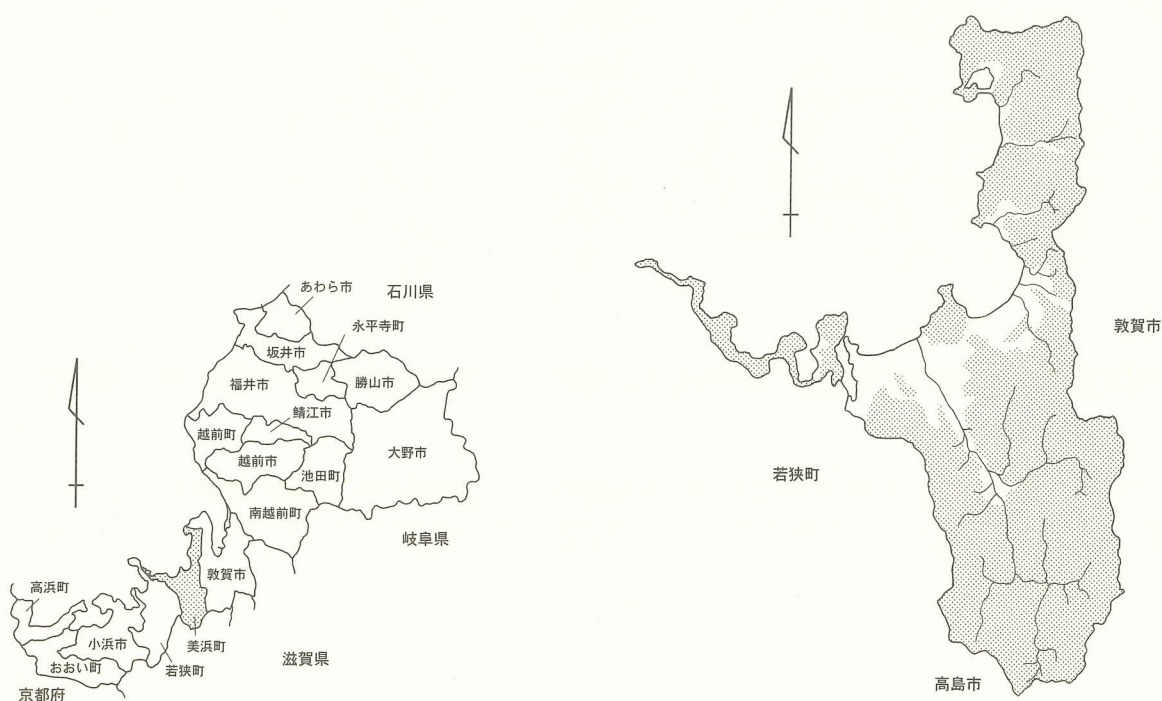
福井県三方郡美浜町は福井県のやや西寄り、若狭地方の最東部に位置する。人口は11,235人(平成19年1月1日現在)。地勢は南北に長く、北は日本海に面し、南は野坂山地で敦賀市、若狭町、滋賀県高島市と接する。東は敦賀半島、野坂山地を境に敦賀市と接し、西は常神半島と三方五湖周辺の低地帯で若狭町と接する。町域の面積は152,32km²、町域の南半は野坂山地が占め、東西は野坂山地から敦賀半島、常神半島が連なるため、町域の大部分は山地、丘陵地となり、平野部はこの3つの山塊に囲まれ、若狭湾に面して町域の北側に限定的に見られるのみである。この平野部に市街地、農地が集中する。

平野の中央部には耳川などの小河川によって形成された低位河岸段丘、後背湿地、小自然堤防を伴う扇状地性の沖積地が若狭湾に面して広がり、西側にはこの沖積地から連続する旧久々子湖の隆起段丘である湖成段丘および小海岸段丘が三方五湖、若狭湾に面して展開する。御岳山、天王山を隔てた東部には敦賀半島西岸基部に広がりを持った海岸段丘が発達し、敦賀半島西岸には小沖積地が点在する。

山地部の地質は、敦賀半島、耳川左岸で花崗岩が主体を占めるが、敦賀半島基部、耳川右岸、常神半島ではわずかに花崗岩の分布が見られるのみで、総じて砂岩、チャートが分布する。耳川右岸上流部、常神半島基部から若狭町にかけては緑色岩が占める割合が高くなる。

平野部は基本的に沖積層からなる。耳川流域では上流部、新庄付近に高位河岸段丘が発達し、河道に沿って中流域まで細長く伸びる。佐野付近から扇状地性の平野部が広がるが、耳川両岸で花崗岩、緑色岩などの砂礫層からなる低位河岸段丘が高位段丘から連続して若狭湾に向けて細長く伸びる。左岸では佐野から興道寺にかけて明瞭な段丘崖を残している。この段丘面は左岸では郷市付近で埋没して洪水山まで至る。

一方、右岸では御岳山から洪水山に向けて舌状に分布するが、埋没段丘であるため現地地形からは把握し



第1図 美浜町位置図(縮尺1/3,000,000)・美浜町地形概略図(縮尺1/300,000)



第2図 美浜町内主要遺跡分布図1 (縮尺 1/50,000) [国土地理院発行2万5千分の1地形図(竹波・早瀬)を使用]



第3図 美浜町内主要遺跡分布図2 (縮尺 1/50,000) [国土地理院発行2万5千分の1地形図(早瀬・三方)を使用]

1 奥ノ浦西遺跡	2 阿弥陀寺古墳群	3 東奥浦遺跡	4 田ノ口遺跡	5 長浜畑遺跡	6 中長浜遺跡
7 浄土寺遺跡	8 浄土寺古墳群	9 浄土寺跡	10 竹波遺跡	11 馬飼端遺跡	12 馬背川遺跡
13 菅浜城址	14 片山遺跡	15 菅浜遺跡	16 菅浜古墳群	17 須可麻神社東古墳	21 菅浜中世墓群
19 乙見古墳群	20 北田東禅寺裏古墳群	21 赤谷窯跡	22 浜ノ上遺跡	23 下庄遺跡	24 佐田遺跡
25 狩倉山付城跡	26 北田神社古墳	27 北田中世墓群	28 はやき台遺跡	29 下行定遺跡	
30 下田遺跡	31 佐田古墳群帝釈寺支群	32 佐田古墳群巾ノ庄支群	33 今市遺跡	34 坊ノ庄遺跡	
35 毛ノ鼻遺跡	36 芳春寺山遺跡	37 芳春寺山経塚	38 南造遺跡	39 大門前遺跡	
40 芳春寺山中世墓群	41 中山付城跡	42 岩出山砦跡	43 満願寺山経塚	44 太田古墳群	
45 坂尻遺跡	46 国吉城址	47 粟屋勝久居館跡	48 佐柿奉行所跡	49 和田古墳群	50 和田台場跡
51 和田弁天台場跡	52 佐柿流田遺跡	53 医王寺跡	54 木野遺跡	55 穴田遺跡	56 木野古墳群
57 木野神社古墳群	58 茶屋ノ上遺跡	59 町田遺跡	60 麻生砦跡	61 秋名子遺跡	62 麻生古墳群
63 猿橋遺跡	64 末国遺跡	65 七反田遺跡	66 沼田宅跡	67 宮代砦跡・宮代中世墓群	68 宮代遺跡
69 五十谷遺跡	70 寄戸遺跡	71 粟屋勝久墓跡	72 早瀬台場跡	73 早瀬遺跡	74 寺山古墳群
75 久々子遺跡	76 野添遺跡	77 西堂林遺跡	78 口背湖遺跡	79 奄沢寺遺跡	80 上田遺跡
81 松原遺跡	82 洪水山前遺跡	83 郷市遺跡	84 獅子塚古墳	85 藤ノ木遺跡	86 馬作遺跡
87 興道寺遺跡	88 興道寺廃寺	89 興道寺古墳群	90 西沢遺跡	91 観音遺跡	92 興道寺窯跡
93 高達古墳群	94 高善庵遺跡	95 殿ノ下遺跡	96 上野遺跡	97 西野遺跡	98 谷ノ口遺跡
99 土井山砦跡	100 土井山古墳	101 南伊夜山銅鐸出土地			

遺跡番号は第2図・第3図と対応する。

がたい。下流域では耳川がこの河岸段丘に挟まれるため、完新世以降の耳川の河川活動は限定され、耳川に沿って氾濫原、小規模な自然堤防、旧河道が見られるに留まる。

耳川流域の西側には気山層と呼ばれる中位段丘が雲谷山から久々子湖、若狭湾に向けて広がる。段丘下部は粘性土、上部は礫層からなる。平野部の東側では敦賀半島基部、佐田から菅浜にかけて礫層からなる低位海岸段丘が広がる。耳川流域の低位河岸段丘、西側の湖成段丘、東側の海岸段丘は美浜町の平野部の中でも面的に広がる主要な段丘面であり、弥生時代後期以後、遺跡の展開を促し、各時代の遺跡を積層して現在の集落まで繋がるという特性がある。

なお、耳川流域、敦賀半島域の小平野部には海岸部に沿って砂洲、浜堤が形成され、背後には後背湿地、ラグーン（潟湖）が発達したものと考えられる。特に耳川左岸浜堤の背後に形成されたラグーンは久々子湖と連続する湖沼性環境を有していたものと思われる。なお、当地域の地形、地質環境を考える上でいくつかの研究成果が近年報告されている（鳥居2002、中江他2002）。

第2節 美浜町の歴史的環境

今回の報告対象遺跡に関わる遺跡を中心に原始から古代までを概観する。

縄文遺跡の大規模な調査事例はなく、集落動向は不明である。敦賀半島西岸先端部、海浜部に面して所在する浄土寺遺跡（7）からは縄文時代前期を主体とする鉢形の土器が採集され（松井・古川1983）、美浜町東部海岸段丘に展開する今市遺跡（33）においても縄文後期末の深鉢、浅鉢が採集されているなど（網谷・森川1986）、断片的に集落の存在を窺うことができる。

弥生時代についても不明な点が多いが、耳川左岸の独立丘陵である土井山南麓部に所在する南伊夜山銅鐸出土地（101）から出土した扁平紐式六区袈裟襷文銅鐸、また耳川右岸中流部の山麓に所在する寄戸遺跡（70）から採集された鉄剣形石剣（廣嶋1986）の存在から考えて、弥生時代中期末の段階に銅鐸、石剣祭祀を執行した拠点集落が耳川中下流域に存在した可能性が指摘されている（美浜町教育委員会2004）。

弥生時代後期以後、平野部の段丘面に集落が進出するようで、興道寺遺跡(87)が所在する耳川左岸河岸段丘の東西縁部から丹後系土器が主体を占める弥生時代後期の甕、壺、高杯、器台などが出土している(山口1984、鯉本2003)。久々子湖東畔の湖成段丘に所在する竜沢寺遺跡(79)においても当該期の甕、壺、ミニチュア土器などが出土し(松葉2003)、また東部、浄土寺遺跡や海岸段丘に所在する毛ノ鼻遺跡(35)からもこの時期の土器が採集されている(山口1984)。

古墳時代初頭の集落として竜沢寺遺跡と近接して所在する口背湖遺跡(78)が知られる。隅丸方形の平面形態を持つ竪穴住居跡2棟に伴って庄内式期の土師器甕、高杯、器台、また砥石などが出土している(入江1986)。口背湖遺跡出土土器には河内、近江、東海からの搬入土器、影響を受けた土器が混在している。

口背湖遺跡以後、古墳時代前期、中期の遺跡動向は全く不明で、興道寺遺跡において古墳時代中期の土師器甕、椀がわずかに出土するに留まる(松葉2003)。美浜町において活発な遺跡展開が認められるのは古墳時代後期、6世紀以後である。

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡(85)は耳川左岸の河岸段丘に大きく展開する集落遺跡である。興道寺遺跡では興道寺廃寺北方においてTK43～TK209型式並行期の竪穴住居跡2棟が確認されており(鯉本2003、松葉2003)、また獅子塚古墳に近接する藤ノ木遺跡では6世紀前葉、MT15～TK10型式並行期の竪穴住居跡1棟が断片的に検出されている(松葉2003)。藤ノ木遺跡竪穴住居址から浜瀬ⅡA式製塩土器が、興道寺遺跡竪穴住居址からは浜瀬ⅡB式製塩土器が出土するなど集落構成集団の土器製塩への関与が窺える。

松原遺跡(81)、早瀬遺跡(73)、興道寺窯跡(92)は耳川流域の6、7世紀を代表する生産遺跡である。松原遺跡は耳川河口部の浜堤に所在し、浜瀬ⅡB式新段階の製塩土器を伴う7世紀中葉の石敷製塩炉3基、6世紀前葉に帰属すると思われる土製模造品の製塩土器への埋納痕跡が検出されている(網谷1995)。早瀬遺跡は若狭湾、久々子湖を見下ろす小海岸段丘に所在し、6世紀代の石敷製塩炉3基が確認されている(松葉2003)。興道寺窯は雲谷山から派生する小支尾根の西斜面に所在し、須恵器窯床面からTK209型式並行期の須恵器杯、杯蓋、高杯が、灰原からMT15型式並行期の杯、杯蓋、高杯、甕、提瓶、短頸壺、角杯形須恵器、あるいは円筒埴輪、土錘などが出土する(入江1986)。

獅子塚古墳(84)、興道寺古墳群(89)、佐田古墳群帝釈寺支群(31)、寺山古墳群(74)、浄土寺古墳群(8)は過去に調査が行われている古墳群である。

獅子塚古墳は藤ノ木遺跡に近接して所在する。全長32.5mの前方後円墳で、外部施設に周濠を持ち、墳丘には円筒埴輪を備え、北部九州系の横穴式石室を内蔵する。三方郡唯一の前方後円墳であることが知られている。石室内からはMT15型式並行期の須恵器杯、杯蓋、高杯、甕、壺、台付子持壺、器台、角杯形須恵器、管玉、環鈴、轡などの馬具、刀、鉄鍬などの武具、鉄斧、曲刃鎌、刀子などの鉄製工具、あるいは鍛冶関連遺物といった豊富な副葬遺物が出土している(入江1986)。6世紀前葉の耳川流域の小首長墳として理解され、若狭耳別の祖、室毘古王(『古事記』)をその被葬者に充てる意見もある。興道寺古墳群は獅子塚古墳の南方、興道寺遺跡の西方に分布する十数基からなる群集墳である。昭和50年代の土地改良事業に伴い周溝を伴う墳底部、横穴式石室が確認されている。近年、3基の埋没墳が調査され、周溝を伴う円墳2基、小石室を埋葬施設に持つ小円墳1基が検出され、6世紀後葉、TK43型式並行期の須恵器が周溝、小石室内から出土している(松葉2002)。獅子塚古墳とともに一古墳群を形成し、獅子塚古墳被葬者から継続する6世紀代の流域小首長墳の系譜にある。なお、興道寺古墳群は平野部に築造され、古墳群が円筒埴輪を持つ点で小浜市太興寺古墳群と共通し、後に付近に古代寺院が建立されるなど白鳳期、さらには律令期に継続する点で興味深い。

獅子塚古墳、興道寺古墳群の被葬者層は藤ノ木遺跡、興道寺遺跡などの集落構成集団が想定され、6世紀代の耳川左岸域では松原遺跡土製模造品に見る海上祭祀の執行、興道寺窯の須恵器生産、早瀬遺跡の土

器製塩に見る手工業生産の掌握が小首長層によってなされ、後の白鳳寺院、興道寺廃寺（88）建立の素地は既に養われていたものと理解できる。

一方、耳川流域の小首長墳が獅子塚古墳、興道寺古墳群であることに対して、美浜町東部域の小首長墳墓群に相当するのが佐田古墳群である。敦賀半島西岸と半島基部の海岸段丘を見下ろす山麓から山裾にかけて分布し、帝釈寺支群は小円墳を含めて10基以上からなる。前方後円墳の可能性も指摘されている4号墳周濠からは力士像、男子像となる人物埴輪頭部片3点、多量の円筒埴輪、須恵器壺、甗などが出土する（中司・美浜町教育委員会1993）。

6世紀後半から7世紀前半にかけて山麓部に造営され、横穴式石室を埋葬施設に持つ小群集墳である寺山古墳群、浄土寺古墳群、阿弥陀寺古墳群（2）などは土器製塩に直接的に従事した海浜集団の墳墓群とみられる。

律令前夜、耳川流域では7世紀後葉に若狭地方でもいち早く古代寺院、興道寺廃寺が建立される。一連の調査で金堂、塔、中門の基壇が部分的に検出され、多量の瓦が出土している。

律令期遺跡の調査事例は決して多くなく、興道寺遺跡北縁部での調査に留まっている。8世紀前半を主体とする竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出されており、須恵器、土師器の食膳具、煮炊具や製塩土器、轆羽口などの鍛冶関連遺物などが出土する。畿内産（系）土師器、製塩土器の出土が比較的多いことが特徴的である。なお、美浜町教育委員会が実施した町内遺跡分布調査で採集された土器の時期から見て、耳川流域においては古墳時代後期から奈良時代まで継続した古代集落が平安時代、さらに中世へと継続するものと、古墳時代後期以後、廃絶していた集落が平安時代以後、再び集落形成されるという傾向がある。後者は耳川右岸下流域に認められ、付近に式内社、弥美神社、和尔部神社、木野神社が所在することが特徴的である。弥美駅家、あるいは郡、郷に関連する官衙関連遺跡、その他、土器製塩遺跡、須恵器窯などの生産遺跡の動向は全く不明である。

〔引用・参考文献〕

- 鯨本真由美編『興道寺遺跡 一県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査一』2003 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
網谷克彦・森川昌和「44 今市遺跡」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
網谷克彦「松原遺跡の調査」『敦賀論叢 敦賀女子短期大学紀要』第10号 1995 敦賀女子短期大学
入江文敏「80 口背湖遺跡」「81 興道寺窯址」「117 獅子塚古墳」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
鳥居直也「第2章 遺跡の立地と周辺の環境 第1節 周辺の地理的環境」
『興道寺古墳群 県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書』2002 美浜町教育委員会
中江訓・小松原琢・内藤一樹『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅） 西津地域の地質』2002
独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
中司照世・美浜町教育委員会「帝釈寺古墳群調査概要」『若狭歴史だより』第2号 1993 福井県立若狭歴史民俗資料館
畠中清隆「南伊夜山銅鑄出土地」『第17回福井県発掘調査報告会資料 平成13年度に発掘調査された遺跡』2002
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
廣嶋一良「72 寄戸遺跡」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
松井政信・古川登「三方郡美浜町浄土寺遺跡出土の遺物について（その1）」
『福井考古学会会誌』創刊号 1983 福井考古学会
松葉竜司編『興道寺遺跡』1998 美浜町教育委員会
松葉竜司編『興道寺古墳群 県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書』2002 美浜町教育委員会
松葉竜司編『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』2003 美浜町教育委員会
美浜町教育委員会編『美浜町歴史シンポジウム記録集1 美浜出土銅鑄が語る ～銅鑄と生きた人々の暮らし～』2004
山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井考古学会会誌』第2号 1984 福井考古学会

第2章 興道寺廃寺（第2～8次調査）

第1節 遺跡の概要

興道寺廃寺（福井県遺跡番号 30071）は北緯 35 度 35 分 55 秒、東経 135 度 56 分 40 秒付近、福井県三方郡美浜町興道寺小字観音、澗ノ上に位置する。現地形の標高は約 24～26m。耳川左岸の低位河岸段丘面の内、段丘東縁の微高地上に立地する。

興道寺廃寺付近から耳川上流に向けて明瞭な段丘崖が残り、段丘面は現在の耳川河道面から 3 m 前後の高位となる。遺跡周辺の微地形を見ると、興道寺廃寺が所在する小字澗ノ上、観音付近にまとまった微高地（段丘東縁微高地）が展開し、西に向けて標高が低下し、町道金安線付近、小字砂河原、中町、土井ノ上付近で微高地と標高 1 m 前後の比高差を持つ低地帯へと至る。さらに西側、小字塚原、御前塚、内町付近で再び段丘西縁の微高地となり、小字四段田、流田付近で後背湿地帯へと至る。

遺跡の現況は数件の民家が建つものの基本的には畑地である。若干ではあるが地形の微起伏が認められ、



写真1 米軍撮影興道寺廃寺周辺空中写真 [米軍撮影空中写真を使用]

地面の高まりを残す部分に金堂や塔などの建物基壇が存在する可能性が漠然と指摘されてきた。この付近には大石が畑地の境界石や石垣として使用されている。昭和50年代の土地改良事業に伴い、礎石状の大石が運び出されたことを伝え聞くが、詳細は不明である。土地改良事業においては畑地の西縁、南縁が削平され、水田へと姿を変えている。



写真2 興道寺廃寺現況1

第2節 既往の調査

興道寺廃寺は昭和初期、県園芸試験場（県農事試験場）建設の際に凹面に布目が残る多量の瓦片が出土したことで注目された。その後も継続的な古瓦の出土採集があり、昭和33（1958）年には試験屋があった興道寺中ノ丁8-26地籍から軒丸瓦がほぼ完形で出土した（第4図）。付近に小字地名「観音」が残ることから郷土史家を中心に「観音畑（廃寺）」と呼ばれ、比較的早くから古代寺院の存在が推測されてきた。昭和45（1970）年には古瓦関係遺跡として『飛鳥白鳳の古瓦』（奈良国立博物館編1970）に収録され、広く学会に興道寺廃寺の存在が発信された。また地元では、美浜町文化財保護委員会委員であった武田久二氏が興道寺廃寺での古瓦採集を精力的に進め、昭和51（1976）年にその資料を紹介する（武田1976）。

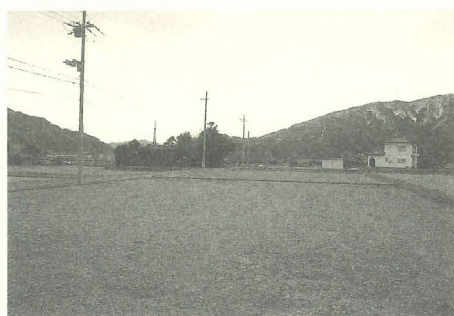
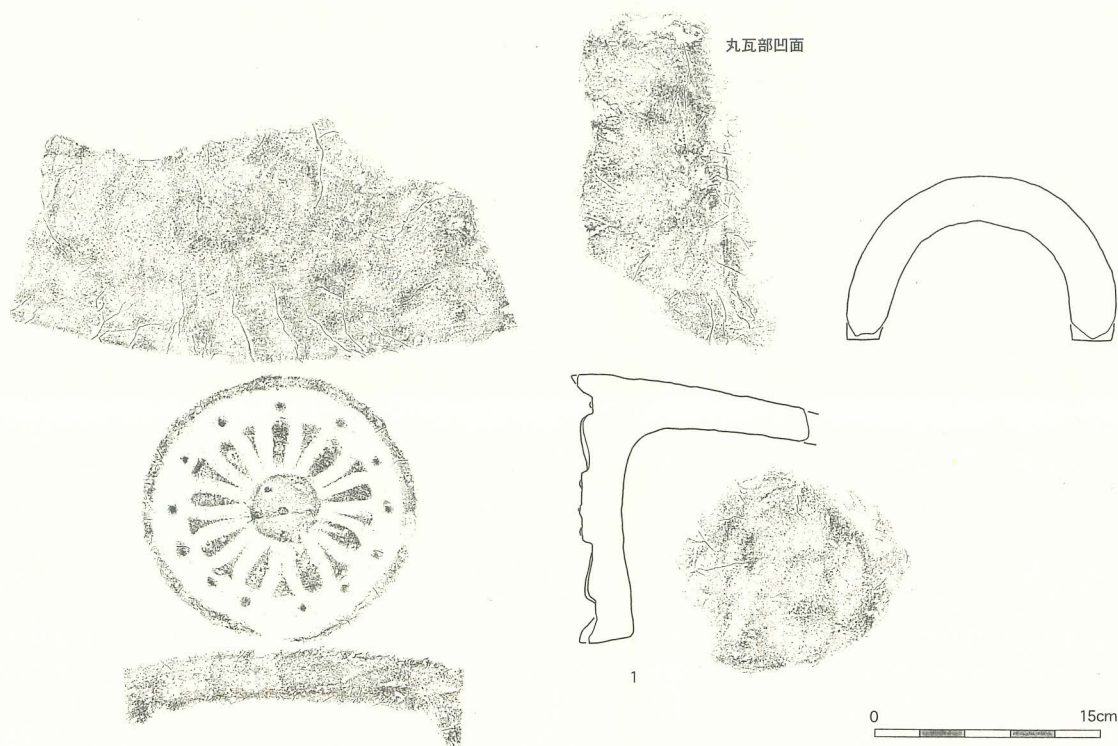
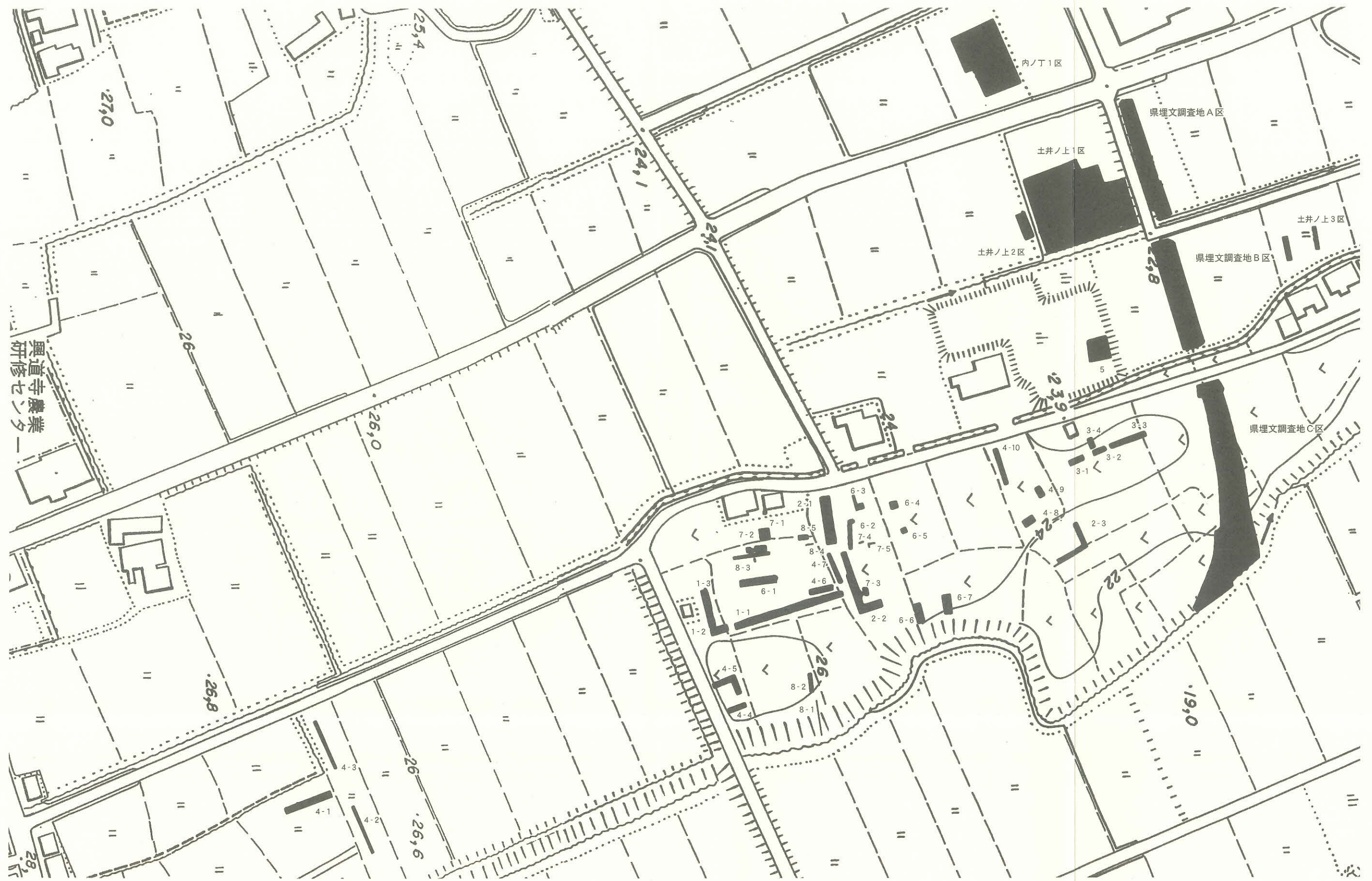


写真3 興道寺廃寺現況2

興道寺廃寺における初めての掘削調査は、昭和52（1977）年、周辺の土地改良事業に伴う福井県教育委員会の試掘調査である。過去の軒丸瓦出土地である中ノ丁8-26地籍の西側、北側で部分的なトレンチ調査が実施されたようであるが、その詳細は伝わっていない。この調査で軒瓦を含む多量の瓦片が出土し、



第4図 興道寺廃寺昭和33年出土軒丸瓦実測図（縮尺1/5）



第5図 興道寺廃寺・興道寺遺跡調査位置図 (縮尺1/1,500)

遺跡名	調査地点/調査面積(m ²)/調査原因	調査期間	調査機関	検出遺構/出土遺物	備考/文献
興道寺廃寺	0次(観音1区) 77.5m ² (トレンチ4本) 農道敷設に伴う存否確認	1999(H10)年7・8月	美浜町教育委員会	・溝などを検出。 ・6世紀後半の須恵器、土師器、製塩土器が出土。	松葉1999
興道寺廃寺	1次(瀬ノ上1区)(トレンチ3本) 192m ² 範囲内容確認	2002(H14)年7・8月	美浜町教育委員会	・土壇状遺構1を検出、付近から瓦が少量出土。 ・溝1を検出、6世紀後半～8世紀の須恵器、土師器、製塩土器が出土。 ・堅穴住居1、7世紀前後の須恵器、土師器、製塩土器が出土。 本書第2章第5節において報告	松葉2003
興道寺廃寺	2次(観音2区)(トレンチ3本) 202m ² 範囲内容確認	2003(H15)年7・8月	美浜町教育委員会		
興道寺廃寺	3次 28m ² (トレンチ4本) 範囲内容確認	2004(H16)年1・2月	美浜町教育委員会	本書第2章第6節において報告	
興道寺廃寺	4次 251m ² (トレンチ10本) 範囲内容確認	2004(H16)年7・8月	美浜町教育委員会	本書第2章第7節において報告	
興道寺廃寺	5次 81m ² 通信施設建設に伴う事前試掘調査	2004(H16)年12月	美浜町教育委員会	本書第2章第8節において報告	
興道寺廃寺	6次 142m ² (トレンチ7本) 範囲内容調査	2005(H17)年7・8月	美浜町教育委員会	本書第2章第9節において報告	
興道寺廃寺	7次 36m ² (トレンチ5本) 範囲内容調査	2005(H17)年11月～ 2006(H18)1月	美浜町教育委員会	本書第2章第10節において報告	
興道寺廃寺	8次 55m ² (トレンチ5本) 範囲内容確認	2006(H18)7月～9月	美浜町教育委員会	本書第2章第11節において報告	
興道寺遺跡	土井ノ上1区 1,087m ² 民間企業社屋建設に伴う事前調査	1997(H9)年11月～ 1998(H10)年1月	美浜町教育委員会	・8世紀前半の堅穴建物4、掘立柱建物5、土坑、小穴を検出。 ・7世紀末～8世紀中葉の須恵器、土師器、製塩土器、輔羽口、鉄滓、鉄釘、紡錘車などが出土。	松葉1998
興道寺遺跡	土井ノ上2区 56m ² 個人土地造成に伴う内容確認調査	2001(H13)年7月	美浜町教育委員会	・8世紀前半の土坑、小穴を検出。 ・8世紀前半の須恵器杯・甕、土師器杯・甕、製塩土器が出土。	松葉2003
興道寺遺跡	土井ノ上3区 40m ² (トレンチ2本) 町水防倉庫建設に伴う試掘調査	2001(H13)年5月	美浜町教育委員会	・時期不明の小穴を検出。	
興道寺遺跡	中ノ丁1区 464m ² 診療所建設に伴う発掘調査	2000(H12)年8・9月	美浜町教育委員会	・8世紀前半の堅穴建物1、土坑、小穴などを検出。 ・8世紀前半の須恵器、土師器、製塩土器、鉄釘が出土。	松葉2003
興道寺遺跡	県埋蔵文化財調査センター調査区 1,670m ² 農道敷設工事に伴う発掘調査	2001(H13)年4～8月	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	・3箇所調査区。 ・6世紀後半～7世紀初頭の堅穴住居址1、時期不明の掘立柱建物跡1、土坑、小穴を検出。 ・古墳時代後期～律令期の須恵器、土師器、製塩土器などが出土。	鯉本2003

出典文献：鯉本真由美編『興道寺遺跡 ― 県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査一』2003 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
松葉竜司編『興道寺遺跡』1998、松葉竜司編『平成10年度興道寺遺跡試掘調査報告書』1999、松葉竜司編『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』2003 いづれも美浜町教育委員会発行

表1 興道寺遺跡・興道寺廃寺遺跡一覽

基壇の一部と思われる地面の高まりが確認されたとのことで寺院遺構が良好に遺存する可能性が指摘された。幸いなことに圃場整備事業が寺院中心部まで及ぶことなく、茶や野菜類の畑地として残されたことから近年まで目立った開発事業が及ぶことなく、遺跡をほぼ現状のまま伝えている。

興道寺廃寺に関しては出土採集瓦を対象としたいくつかの先行研究がある。水野和雄氏は興道寺廃寺出土軒瓦を提示し、軒丸瓦3型式、軒平瓦3型式に分類の上、それぞれの対応関係と年代観を示し、7世紀第3四半期の寺院建立、第4四半期までの寺院存続を指摘した（水野 1987）。佐々木志穂氏らは興道寺遺跡から出土した丸瓦、平瓦を製作技法、焼成の諸属性から検討し、軒瓦と丸瓦、平瓦との対応関係の一例を提示した（鯨本 2003）。その他、大森宏氏、芝田寿朗氏らにより興道寺廃寺が福井県史、美浜町誌に紹介されている（大森 1993・芝田 2005）。

第3節 調査の経緯、経過および方法

第1項 調査の経緯と経過

近年の興道寺廃寺の本格調査は、平成以後の興道寺廃寺近接地における開発事業の増加に起因する。平成9（1997）年以後、興道寺廃寺北～北西方、つまり興道寺遺跡北縁部において開発事業に伴う美浜町教育委員会、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が継続的に進められている状況にあり、これらの開発事業が興道寺廃寺まで及ぶ可能性が予見された。事実、平成10（1998）年には興道寺廃寺を横断する農道敷設計画が浮上し、事業主体である福井県二州農林部と福井県教育庁文化課、美浜町教育委員会における協議、美浜町教育委員会による部分的な試掘調査（興道寺廃寺第0次調査）を経て、計画路線が興道寺廃寺の北方に変更計画されるといった経緯もあった。興道寺廃寺の将来的な現状保存が憂慮され、早急な内容確認調査の必要に迫られることとなったのである。

古くから古代寺院の存在が指摘されてきたにも関わらず、興道寺廃寺の具体相は全く不明であった。古瓦の出土、観音という小字地名から古代寺院の存在が推測されてきたが、実態として官衙、駅家を含めた官衙関連遺跡の可能性も当然考えられるところではあった。このため、古代寺院として認識されている遺跡の性格を明らかにすることが調査の最重要方針であり、併せて遺跡の調査データを蓄積することで今後、興道寺廃寺に開発事業が波及した場合の保護のための基礎資料を得る目的も兼ねていた。

このことから、平成14（2002）年以降、文化庁、福井県教育庁文化課など関係機関の指導のもと、美浜町教育委員会が範囲内容確認調査を継続的に進めてきた。興道寺廃寺、興道寺遺跡における既往の調査について、調査地点を第5図、調査一覧を表1に示した。調査内容の一部については既に報告されている（美浜町教育委員会 1998・2003、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2003など）。

調査は本報告書刊行時で第8次調査を終えている（第1次調査は既報告）。振り返れば第1次調査以後、結果として寺院伽藍を構成する建物基壇が断片的に検出されるものの、その性格を把握しきれずにいた。平成17年度の第6次調査において新たな基壇遺構が検出されたことで既往の調査で確認した遺構の相対的な関係が明らかとなった。調査日誌抄録については第5節以後、調査回数ごとに記す。

第2項 調査の方針と方法

調査を進めるにあたって、遺跡の現況が畑地であり、元は建物礎石であった可能性を残す大石が点在するものの、地表面に礎石や基壇などの寺院構成遺構が明瞭に露出しておらず、全体的に高低差が乏しい畑地であったこと、耕作がされていたことから調査地点の選定に苦慮した。調査着手当初には休耕地の地割りに沿ったトレンチ設定に終始したため、結果として基壇遺構の方位に対して斜めにトレンチを設定するなどの過失が発生している。しかしながら、このような状況の中でも継続的な調査を行うことにより、瓦

溜まりの分布がおおよそ把握され、今後の調査に対して一定の方向性を見出すことが可能となった。結果として第6次調査において版築を伴う基壇遺構の発見へと繋がっている。

トレンチの掘り下げは重機と人力を併用して耕土を除去し、地山面において人力による精査を実施した。トレンチ平面図・土層断面図は基本的に1/20の縮尺とし、適時1/10、1/50の縮尺を併用して作成した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルムを使用し、調査の各段階で撮影した。

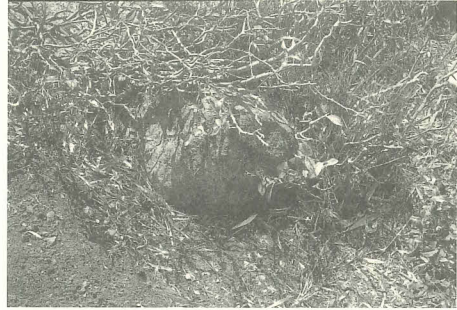


写真4 興道寺廃寺礎石状露頭礫



写真5 興道寺廃寺調査風景1



写真6 興道寺廃寺調査風景2



写真7 興道寺廃寺調査風景3

第3項 遺跡名称

遺跡名称に関しては、従来、遺跡地の小字地名が観音であることと、現況が畑地であったことから地元では観音畑（廃寺）と呼び親しまれ、地域住民、郷土史家には「観音畑廃寺」という名称が一般的であった。その後、昭和62（1987）年、水野和雄氏は興道寺廃寺出土瓦の報告に際して「興道廃寺」という名称を用いた。『福井県遺跡地図』に収録されていた遺跡名称は「興道廃寺」であり、水野氏による呼称が踏襲されている。

その後、福井県史、美浜町誌などの自治体史誌に収録された遺跡名称は「興道寺廃寺」であり、大字名を採用したオーソドックスな遺跡名称が使用される。近年、研究者をはじめ大方の関係者には「興道寺廃寺」という名称が定着しており、平成18（2006）年2月11日、12日に美浜町が開催した歴史シンポジウムではタイトルを「興道寺廃寺の謎に迫る」として、興道寺廃寺という名称を統一的に使用した。

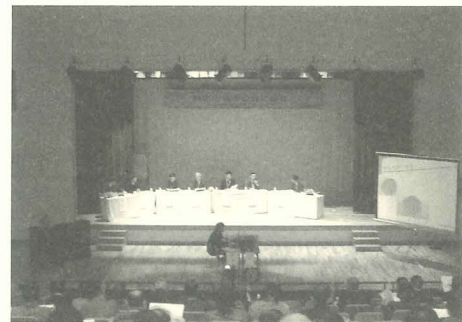


写真8 シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」

このように「観音畑廃寺」「興道廃寺」「興道寺廃寺」という遺跡名称が見られ、興道寺廃寺の調査を進める上で混乱を来して

ており、また今後の遺跡の保存活用を進める上でも遺跡名称が混在することは相応しくないことから、名称を統一するために福井県教育委員会と協議を行い、平成18年6月26日付け、福井県教育委員会教育長通知により遺跡名称が興道寺廃寺として周知された。興道寺廃寺という遺跡名称を設定する上での根拠は以下のとおりである。

- ① 美浜町興道寺に所在する古代寺院は現在のところ1遺跡しかなく、今後さらに同大字内に古代寺院が確認される可能性も低いことから大字名を採用して興道寺廃寺とする。なお、古文書などで確認される天台系中世寺院、興道寺を構成する遺構が今後確認された場合は遺跡名称を「興道寺跡」と呼び分ける。
- ② 「興道寺廃寺」という名称は広く馴染みある遺跡名称になりつつあり、美浜町が開催したシンポジウムによって地域住民に対しても広く周知された。

なお、本報告においては興道寺廃寺という名称を用いているが、平成18年6月25日以前の調査等に係

る事務手続きにおいては、それまでの周知の埋蔵文化財包蔵地名「興道廃寺」を使用している。

第4項 調査回数

興道寺廃寺の調査回数については当初、小字+区の組み合わせを、調査区割を示す用語として採用している。例えば既報告の淵ノ上1区とは小字淵ノ上で実施された1次の調査を示している。しかし、本報告段階で調査回数が8次まで至っており、後に混乱を来すことが見込まれたことから、平成16(2004)年度以後、単純に第〇次調査と調査順に回数を付した。このことから観音1区調査：第0次調査、淵ノ上1区調査：第1次調査、観音2区調査：第2次調査、観音3区調査：第3次調査と整理した。既報告、発表・紙上報告（「福井県における発掘調査報告会」など）、行政文書については適時、読み替えが必要である。

第5項 報告に関する留意点

遺構報告に関しては、遺構種別ごとに基壇遺構はSB、掘立柱建物跡はSH、土坑はSK、溝はSD、柱穴、小穴はPとそれぞれ略号を付した。本章収録遺構図は全て略号を用いている。報告遺構番号については原則、現地調査時に付した遺構番号を使用しているが、一部の調査については遺構番号を再度振り直しているため、遺構番号と略号に付した番号とが一部異なる場合があるので留意されたい。

また報告遺物に関して、基壇遺構に伴う瓦の出土量が膨大であり、細片資料を含めて計4,882点が出土している。この過半が瓦溜まり上層、表土層に伴う小片資料であるため接合関係はほとんど見られず、資料の残存度は決して高くない。このことから原則として一辺が10cm以上残る資料で表面の摩滅が見られない瓦を中心に図化した。なお、表土層出土瓦については軒瓦を除いて図化は行っていない。基本的には全ての瓦を観察しているが、各辺が5cm以下に留まる細片資料については丸瓦、平瓦とに細別し、種別ごとにカウントした。種別を判定しかねる資料については遺物集計表において瓦小片と一括している。また出土瓦の報告に際して、横ナデとしたものは側縁部の方向にナデ調整を施すもの、縦ナデとしたものは狭端部、広端部の方向にナデ調整を施すものを指す。土器などその他の遺物については、総じて破片資料が多いものの、口径が復元可能な資料を抽出し、図化を図った。また、細片資料であっても出土遺構の帰属年代を示すと思われる資料については極力図化を行っている。

第4節 興道寺廃寺第1次調査の確認

調査は平成14年7月1日から7月31日の期間において実施。3本のトレンチを設定、調査面積は192㎡である。興道寺廃寺建立以前に伴う7世紀初頭（TK209型式並行期）の竪穴住居址1棟、興道寺廃寺に伴う土壇状遺構1基、溝1条、柵列1列、古墳時代後期から奈良時代に属する土坑4基、小穴9基が検出された。

土壇状遺構は南北3.24m、東西1.92mを検出。西辺、南辺に幅0.24～0.79m、最深部0.26mの溝が逆L字状に延び、西辺では内側、土壇状遺構側の立ち上がりに0.3mまで自然礫を2、3段に積む。ただし、大半の礫は二次移動をしており、元位置を保つものは南東隅部の2段目までであった。土壇状遺構の一部を断ち割ったが、裏込め、版築痕跡は確認されず、段丘表層の明黄褐色土からなる地山層をそのまま土壇として用い、南辺、西辺に溝、西辺に石積みを設けて内外を区画する構造であったことを既に報告している。この土壇状遺構に重複し、古墳時代後期の遺物を持つ土坑1の最上層に粗砂を叩き締めた痕跡が確認されており、土壇状遺構の構築に当たって前段階の遺構を意図的に埋め、造成を行っていることが窺える。土壇状遺構北側の地山面において十数点の瓦片が出土している。

柵列は5基の柱穴からなり、南北に延びる。南北は磁北に載り、土壇状遺構と同時期である。

第5節 興道寺廃寺第2次調査

第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音1番地1、5番地、26番地。第1次調査で確認された土壇状遺構北側の様相確認と、遺跡の具体相が不明であったことから極力広い調査面積を確保することを目的として休耕地に3箇所のトレンチを設定。トレンチの規模は、1トレンチ東西19.9m、幅2.1m、2トレンチ東西26.0m、南北9.5m、幅3.0m（一部1.8m）、3トレンチ東西11.0m、南北13.2m、幅1.6m、調査面積は計202㎡である。

調査は平成15年7月22日から平成15年8月22日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

7月22日 調査機材搬入、調査区設定、表土掘削。7月24日 各トレンチで人力精査。1・2トレンチにて遺構確認。7月25日 1トレンチにて整地痕跡、多量の瓦片を確認。7月28日 遺構検出写真撮影を進める。遺構掘削に着手。7月31日 2トレンチ西端にて瓦溜まりを確認。3トレンチ地山面で人力精査に入る。8月4日～ 遺構掘削を進める。森本輝久氏（県文化財パトロール員）来跡。8月5日 2トレンチ瓦溜まり上層の精査を進める。8月6日 各トレンチにて平面図、断面図、立面図、遺物出土状況図など本格的な調査図面作成に着手（～8月18日）。8月7日 赤澤徳明氏（県埋蔵文化財調査センター）来跡。8月8日 町長来跡。8月11日 2トレンチ瓦溜まり上層写真撮影。8月13日 2トレンチ遺構写真撮影、入江文敏氏（県立若狭高等学校）来跡。8月14～15日 地域住民来跡。8月19日 2トレンチ瓦溜まり上層遺物取り上げ。8月20日 3トレンチ全体写真撮影。8月21日 1・2トレンチ全体写真撮影。2トレンチ瓦溜まり掘り下げ。8月25日 2トレンチ瓦溜まり下層から多量の瓦片出土、図化を進める。8月26日 畠中清隆氏（県埋蔵文化財調査センター）来跡。8月27日 2トレンチ全体写真撮影。8月28日 2トレンチ瓦溜まり下層遺物取り上げ。8月29日 2トレンチ瓦溜まり下層遺物取り上げ。調査機材搬出、全トレンチ埋め戻し。

第2項 1トレンチ

基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.0～24.2m。耕作土となる黒褐色土（層厚0.3m）下、標高23.6m付近で地山層、黄褐色粘質土層上面へと至る。地山面の傾斜は見られない。1トレンチが周辺の畑地から地形的に一段低くなるのは、過去の道路敷設に伴う地山掘削、土砂搬出を原因とするものであるが、元来は調査地北側に見られる壇状地形とほぼ同等の標高があったものと考えられる。

遺構

黄褐色粘質土層上面において土坑3基（SK1～3）、小穴6基（P1～6）が検出されている。

土坑

土坑2（SK2）は平面形態が方形を呈し、トレンチ外、南側に広がる。土坑の北辺が直線的に東西に延びる。南北検出長2.50m、東西検出長16.69m、検出面からの深さ0.23mを測る。底面の標高は23.3～23.6m。土坑1に切られる。断面形状は不定形ではあるが底面は平坦であり、南に向かってやや深くなる。埋土に黒色、黒褐色系の砂質土、粘質土を持つ。この埋土は総じて堅く叩き締められ、西側では小礫が大量に含まれる。トレンチ西端、土坑2検出面付近から耕土にかけて軒丸瓦1点（25）、軒平瓦1点（26）、丸瓦9点（13～16）、平瓦103点（17～24）と多量の瓦片が出土し、土坑埋土、土坑検出面上面付近から須恵器杯H5点（3・4）、杯H蓋7点（2）、高杯1点、甕1点（5）、律令期に伴うと思われる須恵器杯2点、古墳時代後期から律令期にかけての土師器甕27点、古墳時代後期の製塩土器21点がいずれも破片で出土している。平面形が規格的な方形であること、埋土が堅固に締められ、7世紀初頭までの遺物が蜜に含まれること、土坑西側の検出面において多量の瓦が出土していることなどから、寺院造営段階に意図的に方形土坑を掘削し、叩き締めによる掘り込み地業を行った痕跡と考えられる。

土坑1（SK1）は平面形態が楕円形を呈し、トレンチ外の南方に延びる。南北2.27m、東西検出長

3.08m、検出面からの深さ0.54mを測る。土坑2を切る。断面形状は不定形であるが、中央部でさらに船底状に深くなる。小礫、粗砂、地山土が混じる黒色土、黒褐色土、暗褐色土を埋土に持つが、土坑中央部、検出面付近では攪乱され、瓦片が多く混入する褐色砂質土が堆積する。埋土からは須恵器杯H3点(8)、杯H蓋6点(7)、高杯2点、甕4点(6)、甕1点、土師器甕32点、赤彩土師器杯1点、古墳時代後期の製塩土器60点(10~12)、丸瓦5点、平瓦3点、中世の土師質甕1点(9)がいずれも破片で出土する。中世に帰属する遺構と思われる。

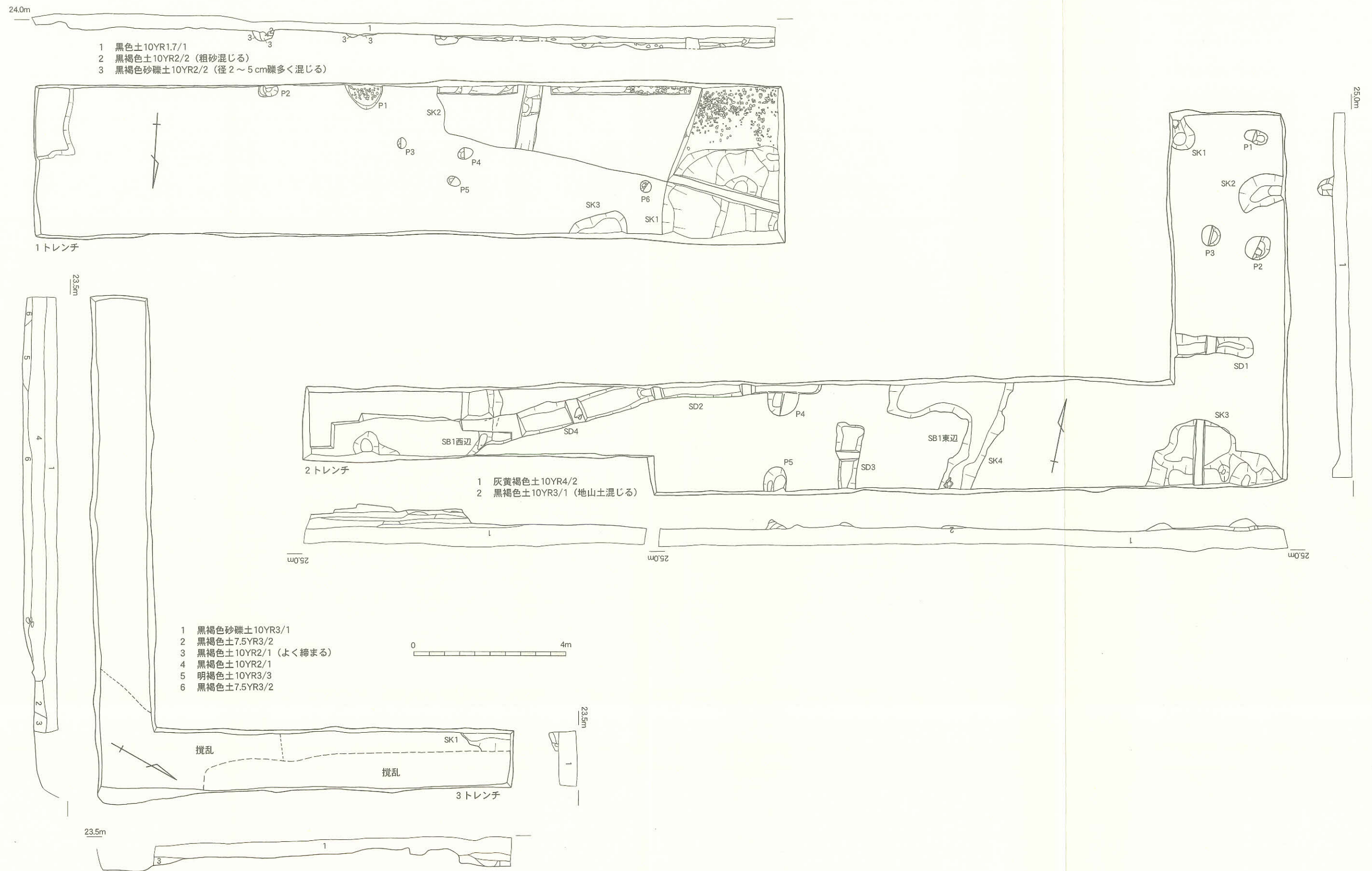
土坑3(SK3)は平面形態が崩れた円形を呈する。南北検出長0.57m、東西検出長1.53m、検出面からの深さ0.27mを測る。断面形状は丸みを帯びた平底状で、西側が若干深くなる。小礫を主体とする黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片4点が出土。

小穴

小穴1(P1)は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.66m、東西1.00mを測る。検出面からの深さは0.09mと極めて浅い。断面形状は底面周囲が若干深くなる。黒褐色砂礫土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片5点、製塩土器片3点が出土。小穴2(P2)は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.29m、東西0.53m、検出面からの深さは0.26mを測る。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土、黒褐色砂礫土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片2点、製塩土器片1点が出土。小穴3(P3)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.29m、東西0.31m、検出面からの深さ0.24mを測る。断面形状は不定形で、北側が深くなる。黒色土を埋土に持つ。小穴4(P4)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.30m、東西0.42m、検出面からの深さ0.23mを測る。断面形状は平底となる。黒色土を埋土に持つ。小穴5(P5)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.31m、東西0.26m、検出面からの深さ0.23mを測る。断面形状は鋭く落ち込み、平底状となる。砂質の黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。小穴6(P6)は平面形態が円形を呈し、径0.31m、検出面からの深さ0.09mを測る。断面形状は北側がさらに深くなる不定形である。黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。

遺物

2は須恵器杯H蓋。復元口径15.0cmを測る。内外面にやや強いナデを施し、口縁端部を丸く収める。3・4は須恵器杯H。それぞれ復元口径11.8cm、10.1cmを測る。底部外面に回転ヘラ削り痕が残る。3は立ち上がりがやや内傾し、口縁端部はわずかに外反する。4の立ち上がりは強く内傾し、口縁端部は外反する。受け部には沈線を巡らす。いずれもTK209型式の範疇に収まると思われる。5・6は須恵器甕胴部。内面に同心円状当て具痕、外面に平行文叩きが残る。7は須恵器杯H蓋。復元口径は14.8cmで、外面に強いナデを施す。口縁端面はわずかに段をなす。8は須恵器杯Hで復元口径は12.8cmを測る。立ち上がりは内傾し、口縁端部を丸く収める。7・8もTK209型式と思われる。9は土師質甕。復元口径13.0cm。口縁部は轆轤ナデで調整する。硬質である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部を面取りする。中世の所産である。10~12は製塩土器。10は口径6.3cm、器高5.8cmを測る。手捏ねで作り、外面は指圧痕やナデを残す。内面には白色の塩化ナトリウムが付着する。11には外面に明瞭な輪積み痕が残る。12は外面に指圧痕、内面はナデが残る。6世紀後葉、浜瀬ⅡB式に並行する時期と思われる。

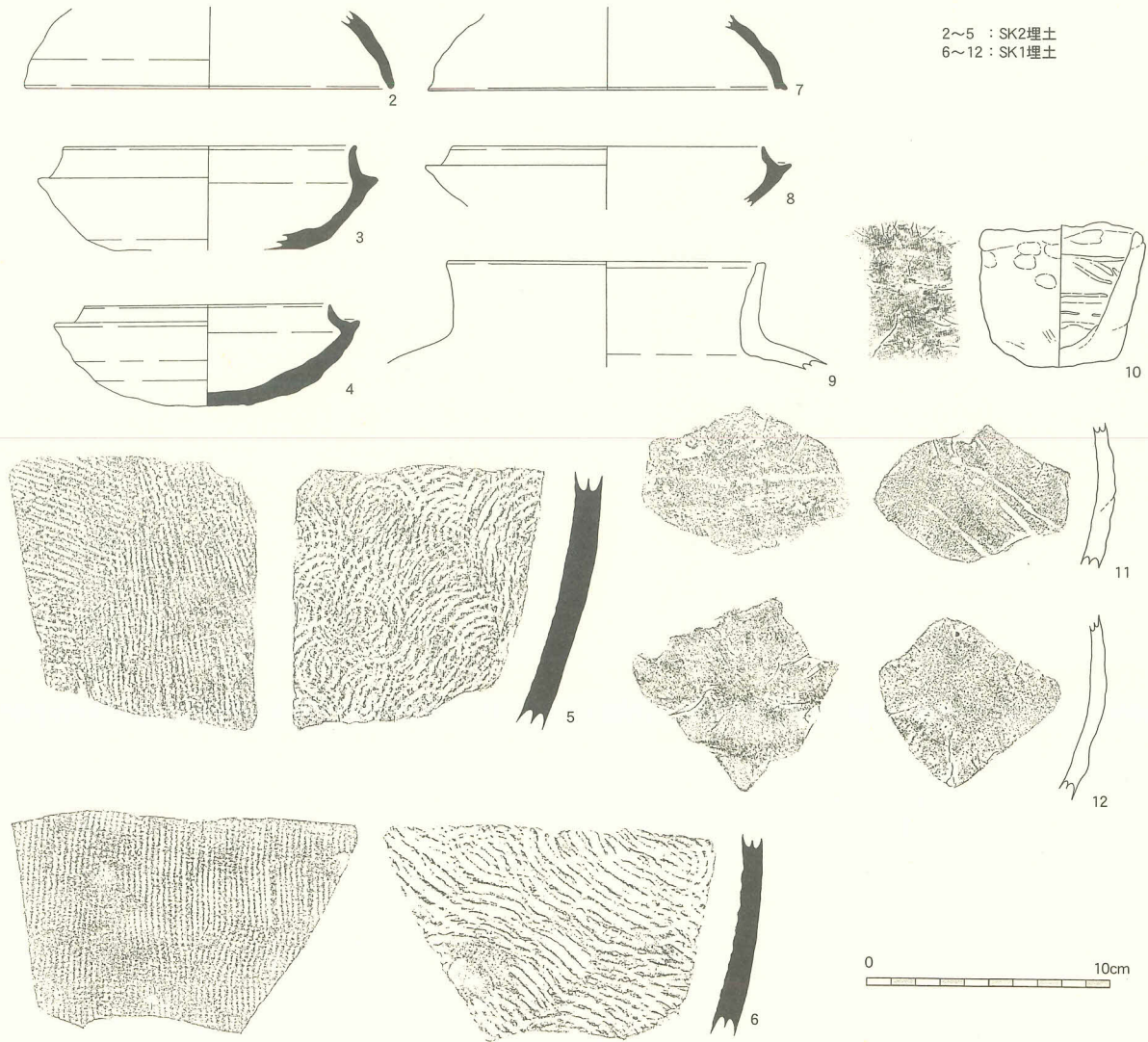


第6図 興道寺廃寺第2次調査1~3トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺 1/100)

13~16は丸瓦。13は凸面に2cmあたり5本の平行叩きを施した後、横方向に弱くナデ消す。凹面は布目が密で、布綴じ合わせ目が残る。端部は未調整。14~16は凸面に強いナデを施す。16は縦方向のナデ。凹面はいずれも布目を残す。14、16は側縁凹面を面取りする。

17~24は平瓦。17~19の凸面には平行叩き、凹面は布目のナデ消しを施す。19の叩き目は2cmあたり7本と細かい。17、18の端部、18、19の側縁部は未調整。20は1単位が縦0.3cm、横0.5cmの斜格子叩きを施し、縦方向に強くナデ消す。凹面には布目、模骨痕を残す。側縁部は未調整。21は凸面に1単位が縦1.2cm、横1.3cmの斜格子叩きを施す。端部、側縁部は未調整。22は1単位が縦0.9cm、横1.5cmの正格子叩きを凸面に施し、凹面は布目をナデ消す。側縁凹面を面取りする。23、24は凸面に強いナデを施す。23の狭端凸面には1単位が縦0.4cm、横0.6cmの斜格子叩き痕をわずかに留める。24は縦方向のナデで、凹面の布目は密、端部、側縁部の凹面を薄く面取りする。

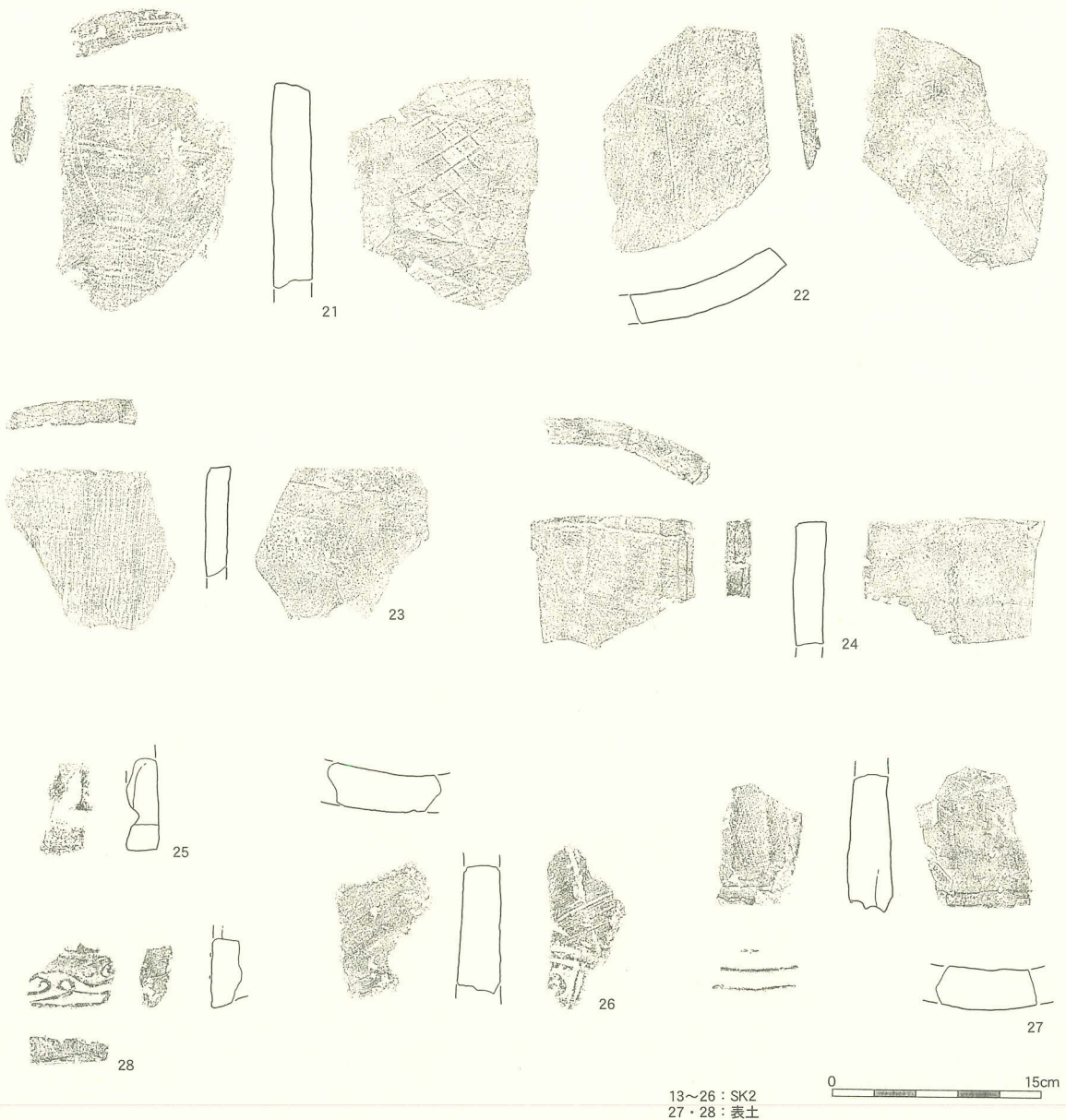
25は外縁が素縁となる軒丸瓦。瓦当は薄く作る。素縁の幅1.8cm。26は三重弧文となる軒平瓦の平瓦部。凸面には1単位4枚からなる花卉型押し文が残る。凹面は布目をナデ消す。28、29は表土から出土した軒瓦。27は三重弧文軒平瓦。瓦当厚3.2cm。瓦当文様の断面形状は弧線が鋭い山形状で、凹線は浅いU字状を呈する。直線顎。平瓦部凸面には横方向の強いナデを施し、広端凸面を第1弧線に沿って幅1.3cmにわたって強く面取りする。広端凹面に強いナデを施し、平瓦部凹面には模骨痕が残る。28は偏行唐草文軒平瓦。瓦当現存厚4.9cm。支葉が内区下界線から派生し、主葉とともに内区右界線に接する。



第8図 興道寺廃寺第2次調査1トレンチ出土土器実測図(縮尺1/3)



第9図 興道寺廃寺第2次調査1トレンチSK2出土瓦実測図(縮尺1/5)



第10図 興道寺廃寺第2次調査1トレンチSK2・表土出土瓦実測図(縮尺1/5)

第3項 2トレンチ

基本層序

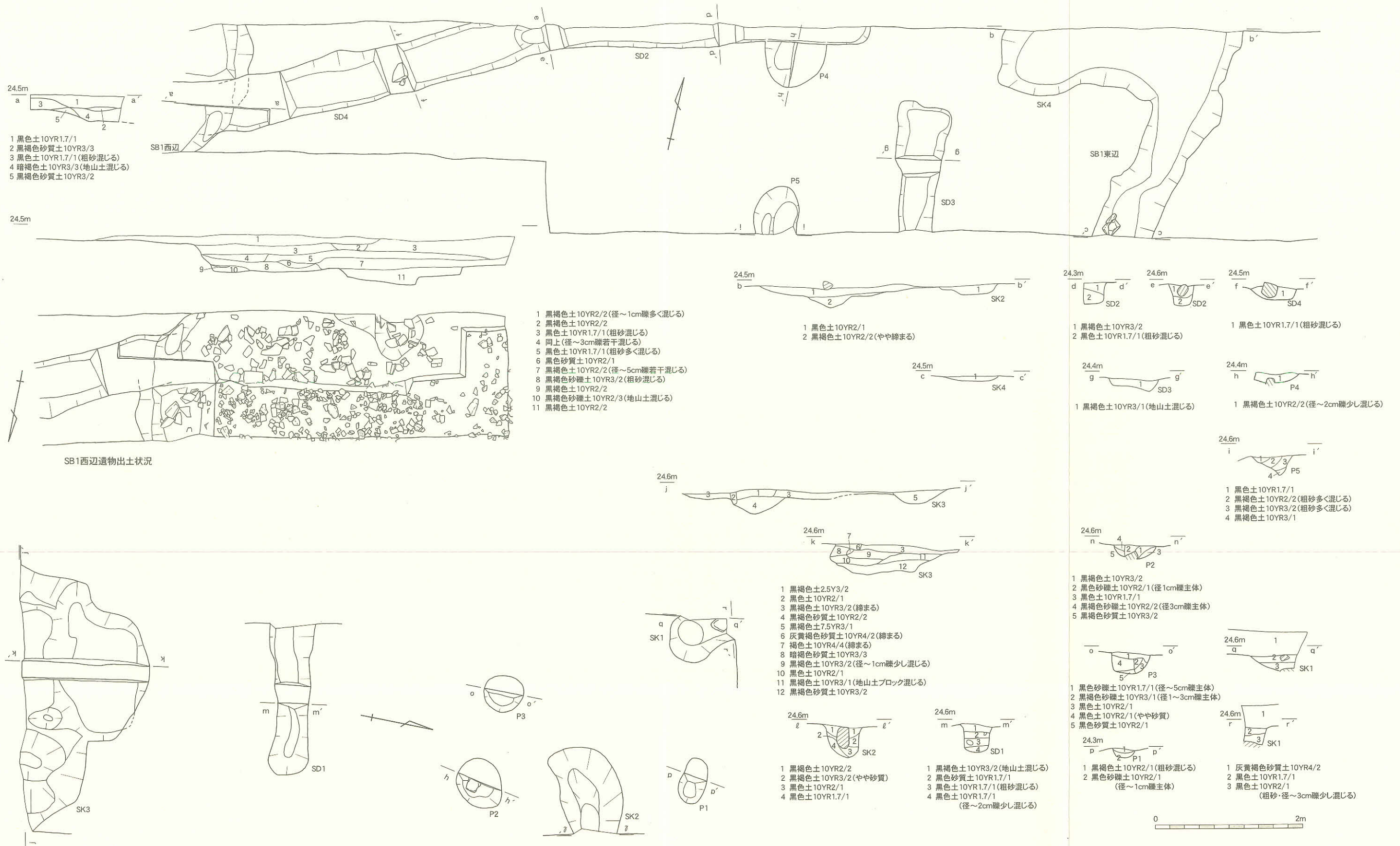
調査地は畑地であり、地表面の標高24.8~25.0m。耕作土となる灰黄褐色土(層厚0.4~0.5m)下、標高24.4~24.5mで地山土、明黄褐色粘質土層上面へと至る。トレンチ西端では瓦溜まりとなり、最下面、標高23.9m前後で明黄褐色砂礫土層へと至る。

遺構

明黄褐色粘質層上面において、区画痕跡(SK4)、礎石掘り方(P4、P5)を伴う基壇遺構1(SB1)、土坑3基(SK1~3)、溝4条(SD1~4)、小穴3基(P1~3)が検出されている。

基壇遺構

基壇遺構1(SB1)は第1次調査1トレンチで確認された土壇状遺構と同一遺構であり、この遺構の



第11図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺1/50)

北側にあたる。基壇北側を斜めに横断する形で検出した。基壇部分の周囲の地山を掘削することで基壇と地山とを区画する削り出しを持つ基壇である。基壇の検出規模は南北検出長 2.83m、東西 12.12m を測る。検出面の標高は約 24.3～24.4m。

基壇面は地山層を基壇構成土としている。直上には耕作土が堆積するため、この基壇面の上に盛土、版築が存在したかは不明である。後述する礎石掘り方の遺存度が乏しいことから地山層を基壇下位として基壇上部に盛土、版築が存在した可能性は残る。検出基壇面には溝 3 基 (SD 2～SD 4)、礎石掘り方 2 基 (P 4、P 5) が分布する。

基壇東辺は不定形な溝状の遺構である土坑 4 (SK 4) を掘削することで構築する。基壇面と基壇東辺からさらに東側に見られる地山上面との検出面のレベル差はほとんどない。土坑の断面形状は極めて緩やかな弧状を呈し、基壇面、また地山と連続する。底面の標高は 24.3m であり、基壇面と約 0.1～0.2m のレベル差を持つに留まる。

反面、基壇西辺ではさらに西側に向けて地山層を 0.3～0.4m ほど広く掘削することで標高 23.8～23.85m に平坦面を造り出す。この地山層の削り出し部分、基壇西辺の断面形状は直立ではなく、直線的な傾斜を持つ。基壇西辺の地山削平面には礫、粗砂、大量の瓦片が混じる黒色土、黒褐色土が厚く堆積する。この地山面直上に残存率が高い瓦片が基壇西辺から約 4.0m の範囲にわたってほぼレベルを揃えてまとまって分布する。軒平瓦 5 点 (44～48)、熨斗瓦 2 点 (49・50)、隅落とし平瓦 1 点 (51)、丸瓦 42 点 (52～62)、平瓦 82 点 (63～89)、須恵器甕片 1 点 (29)、製塩土器片 1 点が出土。この瓦溜まりの上位にはさらに細片化した瓦片などが大量に堆積する。軒丸瓦 10 点 (90～98)、軒平瓦 5 点 (99～103)、丸瓦 185 点 (104～112)、平瓦 1,244 点 (113～119)、須恵器杯H蓋 2 点、高杯 1 点、杯 1 点 (32)、杯B 1 点 (30)、杯Aか杯Bと思われるもの 3 点、杯B蓋 3 点 (33・34)、椀 1 点 (31)、平底の底部を持つ須恵器皿 2 点、甕 2 点、壺 1 点、鉢 1 点 (35)、土師器杯 2 点 (36)、赤彩土師器杯 12 点、甕 32 点、底部が平底となる皿 1 点、中世の越前焼甕 1 点、製塩土器 22 点 (37・38)、そして加工痕跡が残る鉄製品 1 点 (39) が破片の状態で出土した。前者はほぼ元位置を保つが、後者は二次堆積による流れ込みによるものと考えられる。

基壇東辺、西辺には石積み、石列などの構造物は見られない。

なお、基壇西辺の瓦溜まりにおいては瓦の出土量が膨大であったことから、トレンチの北側の大半は完掘せず、瓦溜まり上層検出面まで掘削を留めた。

土坑 4 (SK 4) は基壇遺構 1 東辺を構成する遺構である。平面形態は南北に延びる幅の狭い溝状を呈し、一部で西側に広がる。南北検出長 2.94m、東西最大幅 3.02m、東西最小幅 0.68m を測る。検出面からの深さは 0.12m。断面形状は浅い平底状となる。出土遺物はない。

礎石掘り方 1 (P 4) は平面形態が円形を呈し、南北検出長 0.62m、東西検出長 0.78m を測る。検出面からの深さは 0.13m。断面形状は丸みを帯びて弧状に底面に至る。黒褐色土を埋土に持つ。底面に拳大の礫がまとまって分布するが、調査段階では地山から露出する礫である可能性も考えられたことから、この礫の平面、断面図化は行っていない。出土遺物はない。礎石掘り方 2 (P 5) は平面形態が楕円形を呈し、南北検出長 0.66m、東西 0.62m を測る。検出面からの深さは 0.26m。断面形状は東に向かって深くなる尖底状である。埋土は粗砂が混じる黒褐色土が主体である。須恵器高杯 1 点 (40) が出土。礎石掘り方 1 で確認された底面での礫の集中は認められなかった。ともに基壇建物に伴う礎石掘り方と考えられる。

土坑

土坑 1 (SK 1) は平面形態が崩れた円形を呈する。南北検出長 0.89m、東西検出長 0.58m、検出面からの深さ 0.23m を測る。断面形状は不定形である。底面で確認された小礎石状の自然礫は地山層含有礫である。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。

土坑2 (SK2) は崩れた楕円形を呈し、南北検出長 0.89m、東西検出長 0.58mを測る。検出面からの深さは0.42m。断面形状は南側がわずかに深くなる弧状となる。黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。

土坑3 (SK3) は平面形態が崩れた円形を呈し、南北検出長 1.74m、東西 3.48mを測る。検出面からの深さは0.42m。断面形状は不定形で一部がオーバーハングする。埋土は黒褐色土が主体を占め、一部に褐色系の砂質土が混じる。古墳時代後期の須恵器杯H 2点、杯H蓋 1点、甕 1点、古墳時代後期から律令期の土師器甕 21点、軒丸瓦 1点 (120)、丸瓦 3点、平瓦 7点 (121~124)、瓦小片 5点、製塩土器 10点がいずれも破片で出土。底面の凹凸が顕著であり、基壇構築に伴う粘土採掘坑であるものと考えられる。

溝

溝1 (SD1) は細く延び、東西 2.07m、最大幅 0.62m、検出面からの深さ 0.38mを測る。基壇遺構1の上面で検出された溝2と平行する方位を持つ。断面形状は丸みを帯びた箱型状となる。埋土は地山土、粗砂、小礫が混じる黒色土を主体とする。須恵器杯H 1点、杯H蓋 1点、平瓦 1点が破片で出土。

溝2 (SD2) は東西に細長く延びる。溝4に切られる。東西 4.85m、最大検出幅 0.34m、検出面からの深さ 0.28mを測る。断面形状は箱型となる。埋土には上層に黒褐色土、下層に粗砂が混じる黒色土を持つ。律令期の須恵器壺類 1点、土師器甕片 1点、丸瓦 3点、平瓦 18点、瓦小片 7点、中世の土師器皿 1点 (41) が出土する。

溝3 (SD3) は南北に細く延びる。南北検出長 1.67m、最大幅 0.70m、検出面からの深さ 0.16mを測る。断面形状は西側がやや深くなる平底状となる。埋土には地山土が混じる黒褐色土を持つ。古墳時代後期の須恵器杯H蓋 2点 (42)、土師器甕 3点が破片で出土。

溝4 (SD4) は東西に細長く延びるが、溝2と方位は揃わない。東西検出長 5.30m、最大幅 0.78m、検出面からの深さ 0.17mを測る。溝2、基壇西辺に伴う瓦溜まりを切る。断面形状は尖底状である。粗砂が混じる黒色土を持つ。土師器甕 2点、底部を糸切りする皿 1点、丸瓦 3点、平瓦 13点、瓦小片 8点が破片で出土。

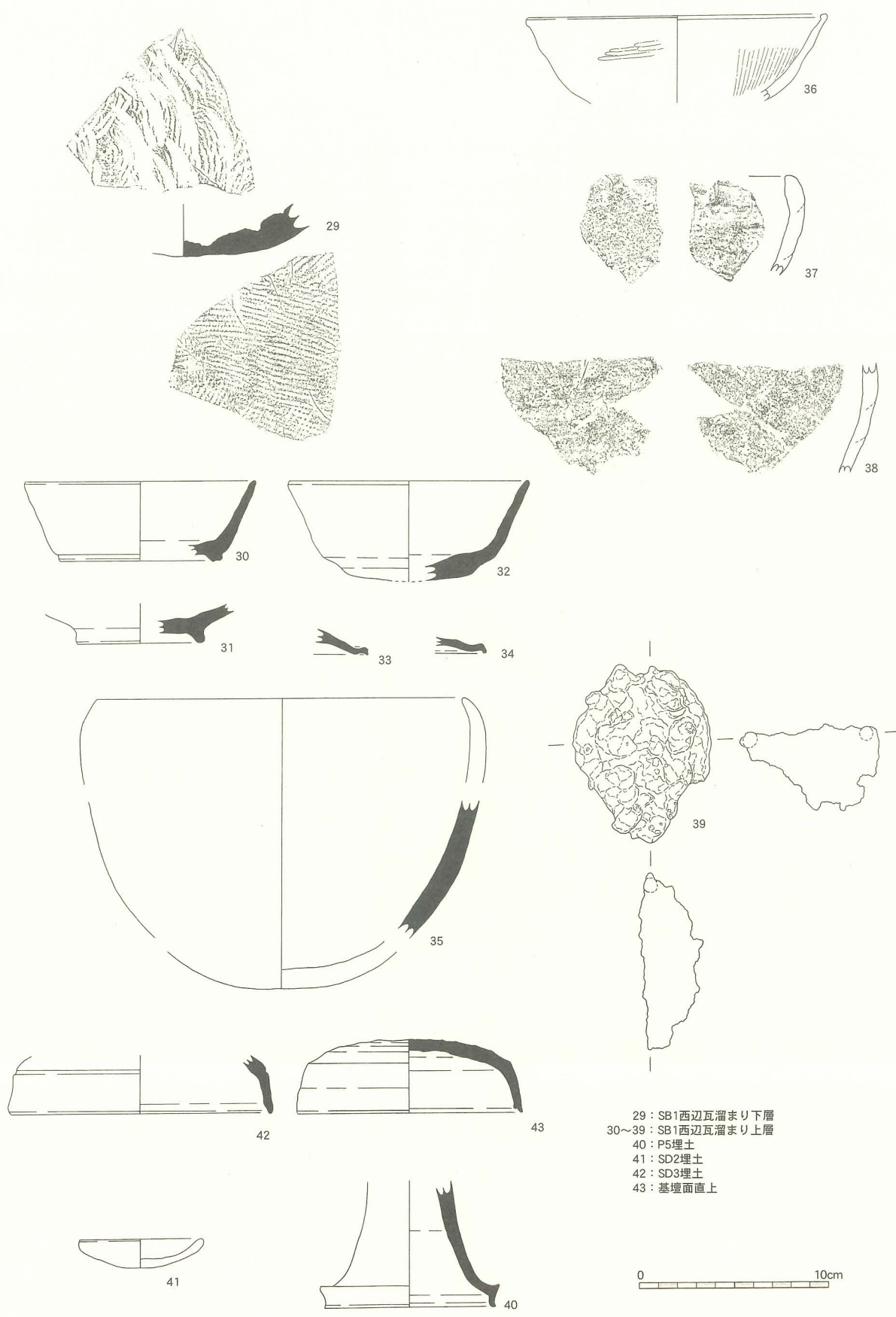
溝2が基壇遺構に先行して6世紀後半、溝3、溝4は基壇建物廃絶以後、13世紀後半に属するものと思われる。

小穴

小穴1 (P1) は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.30m、東西 0.63m、検出面からの深さ 0.13mを測る。断面形状は浅い弧状となる。小礫、粗砂が混じる黒色土を埋土に持つ。小穴2 (P2) は平面形態が円形を呈し、南北 0.61m、東西 0.63m、検出面からの深さは 0.18mを測る。断面形状は弧状となる。小礫が混じる黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。小穴3 (P3) は平面形態が円形を呈し、南北 0.54m、東西 0.50m、検出面からの深さは 0.29mを測る。断面形状は弧状となる。小礫が混じる黒色土を埋土に持つ。いずれも遺物は出土していない。

遺物

29 は須恵器甕底部。内面には強い同心円状当て具痕、外面は平行文叩きが残る。30 は須恵器杯B。30 は復元口径 12.1 cm、器高 4.2 cm、底径 8.5 cmを測る。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。高台はやや内傾し、高台端面は段をなす。8世紀後葉の時期と思われる。31 は須恵器椀。復元底径は 6.6 cmを測る。生焼け状を呈する。32 は須恵器杯。復元口径 12.7 cmを測る。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部は肥厚し中心部でやや窪む。33・34 は須恵器杯B蓋口



第12図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり出土土器・鉄製品実測図（縮尺1/3）

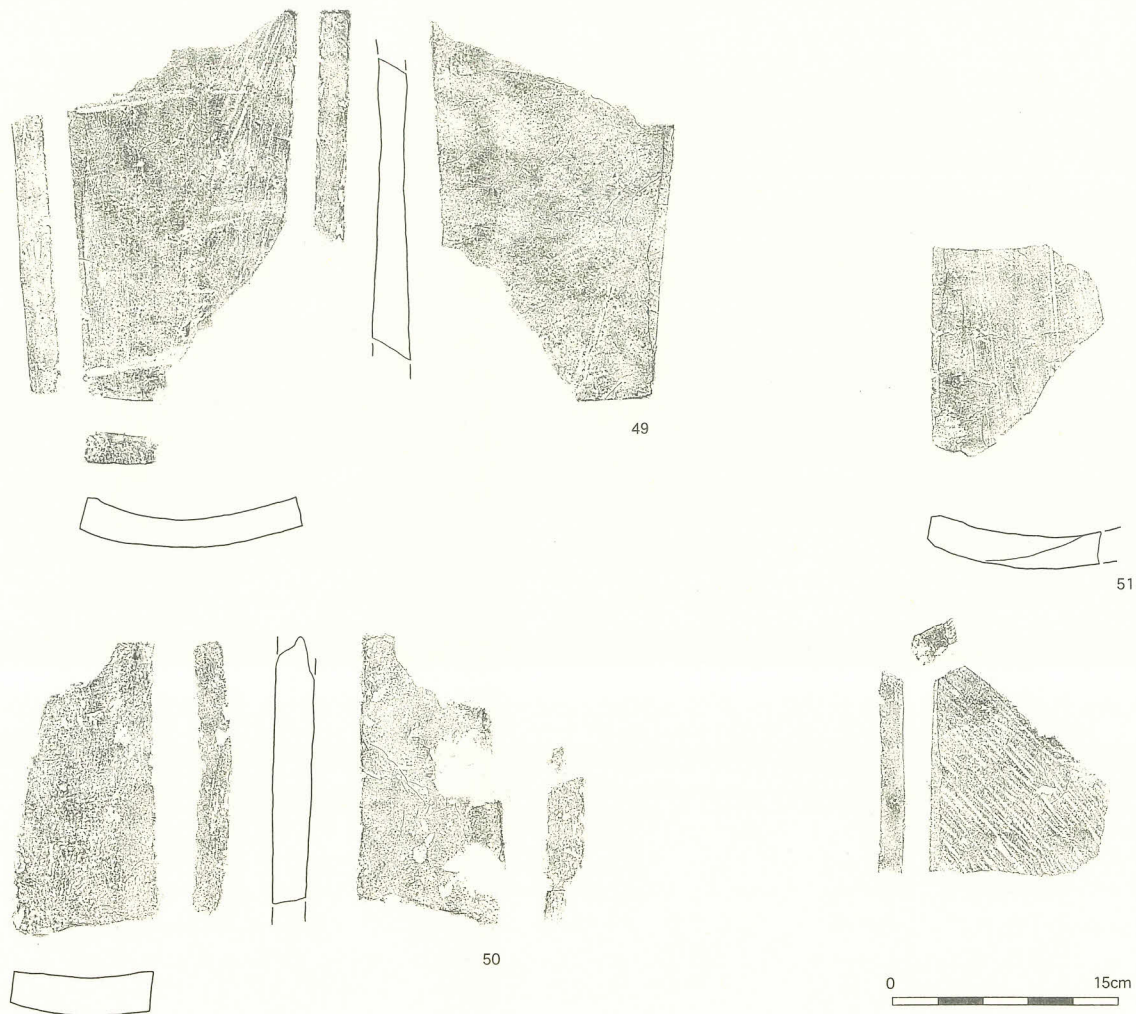


第13図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)

縁部。口縁部はやや屈曲し、口縁端部を下外方に短くつまみ出す。33は口縁端部外面に段をなす。34は口縁端部を面取りする。器高は低くなるものと思われる。35は須恵器鉢胴部。外面にヘラミガキを施す。36は土師器杯。復元口径15.8cmを測り、内面に放射状暗文、外面にミガキを施す。口縁端部は丸く収めるが内面はやや肥厚する。8世紀の時期と思われる。37・38は製塩土器片。ともに外面に輪積み痕を残す。39は鉄製遺物であるが、鉄塊付着のため原形は留めていない。元来は径0.7cm程度の環状形を呈していたと考えられる。重量296.0g。40は須恵器高杯脚部。復元底径9.0cm。脚端部は内側に屈曲する。41は土師器皿。復元口径6.4cm、器高1.5cmを測る。手捏ねで作る。口縁部の立ち上がりは弱く、緩やかに上外方に延び、口縁端部は丸く収める。13世紀後半頃の所産と思われる。42は須恵器杯H蓋。復元口径13.7cmを測る。天井部と口縁部の境に1条の沈線が巡り、口縁端部は丸く収める。43は基壇面直上から出土した須恵器杯H蓋。復元口径11.8cm、器高3.9cmを測る。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部はやや平坦で、口縁部は直立する。口縁端面に段をなす。TK10型式の範疇に収まるとと思われる。

瓦については瓦溜まり下層、瓦溜まり上層、土坑3の順に報告する。

44～48は三重弧文軒平瓦。それぞれ瓦当厚はそれぞれ3.0cm、2.8cm、3.1cm、2.8cm、2.9cmを測る。44、46、48の瓦当文様の断面形状は弧線が鋭い山形状を、凹線は浅いU字状を呈する。いずれも直線顎平瓦部凸面に強い横ナデを施し、凹面には布目痕、模骨痕を残す。広端凹面には強いナデ調整が残る。45、47の瓦当弧線の断面形状は第1、第3弧線を鋭く作り、第2弧線が面を持つ。凹線は極めて浅い箱型を呈する。ともに平瓦部凸面には横方向に強いナデを施し、広端凸面を第1弧線に沿ってそれぞれ1.1cm、1.5



第14図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)



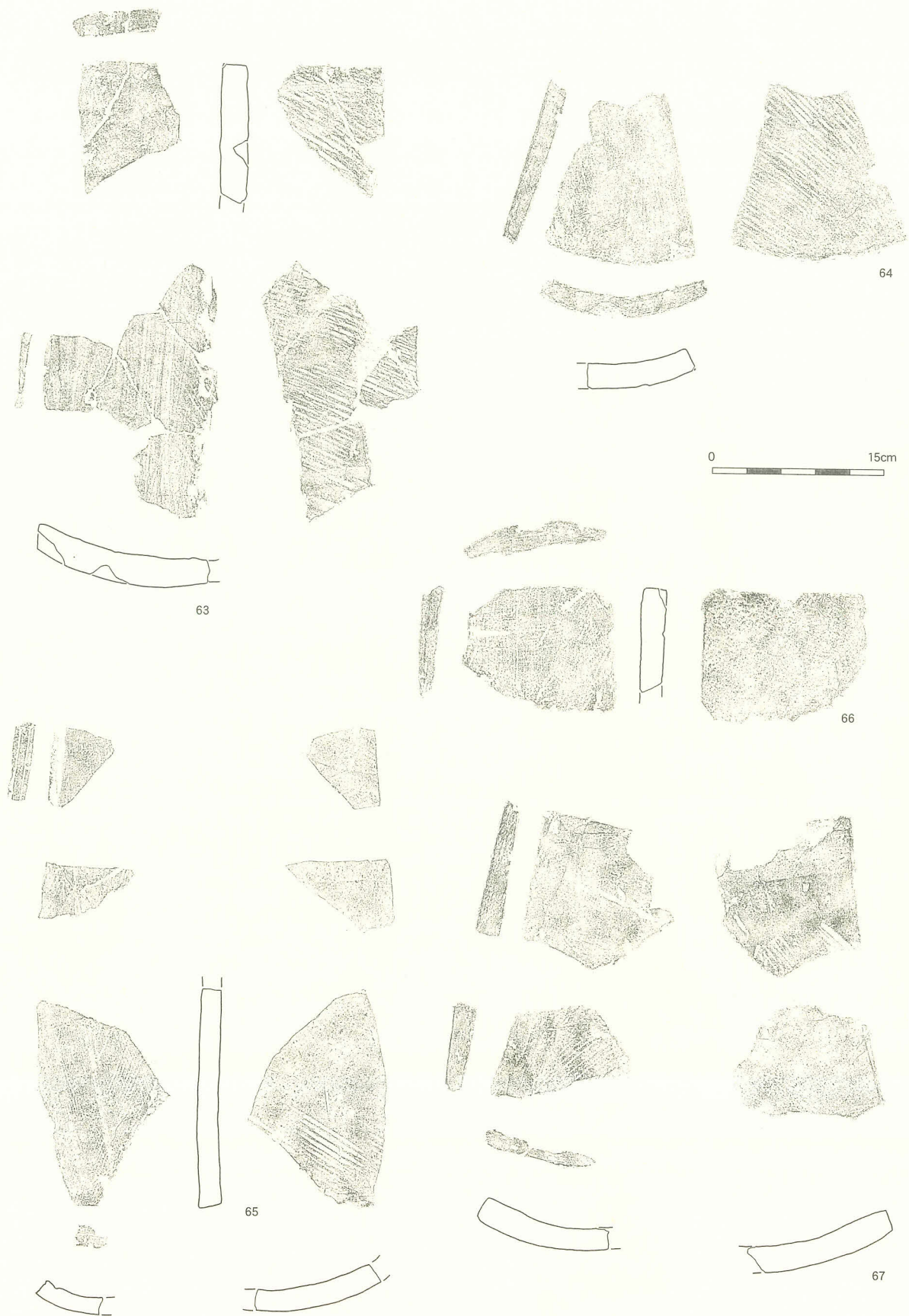
第15図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図3 (縮尺1/5)

cmの幅で強く削ることで面取りする。このため瓦当厚は薄くなる。44、46、48で見られた広端凹面のナデ調整は見られない。

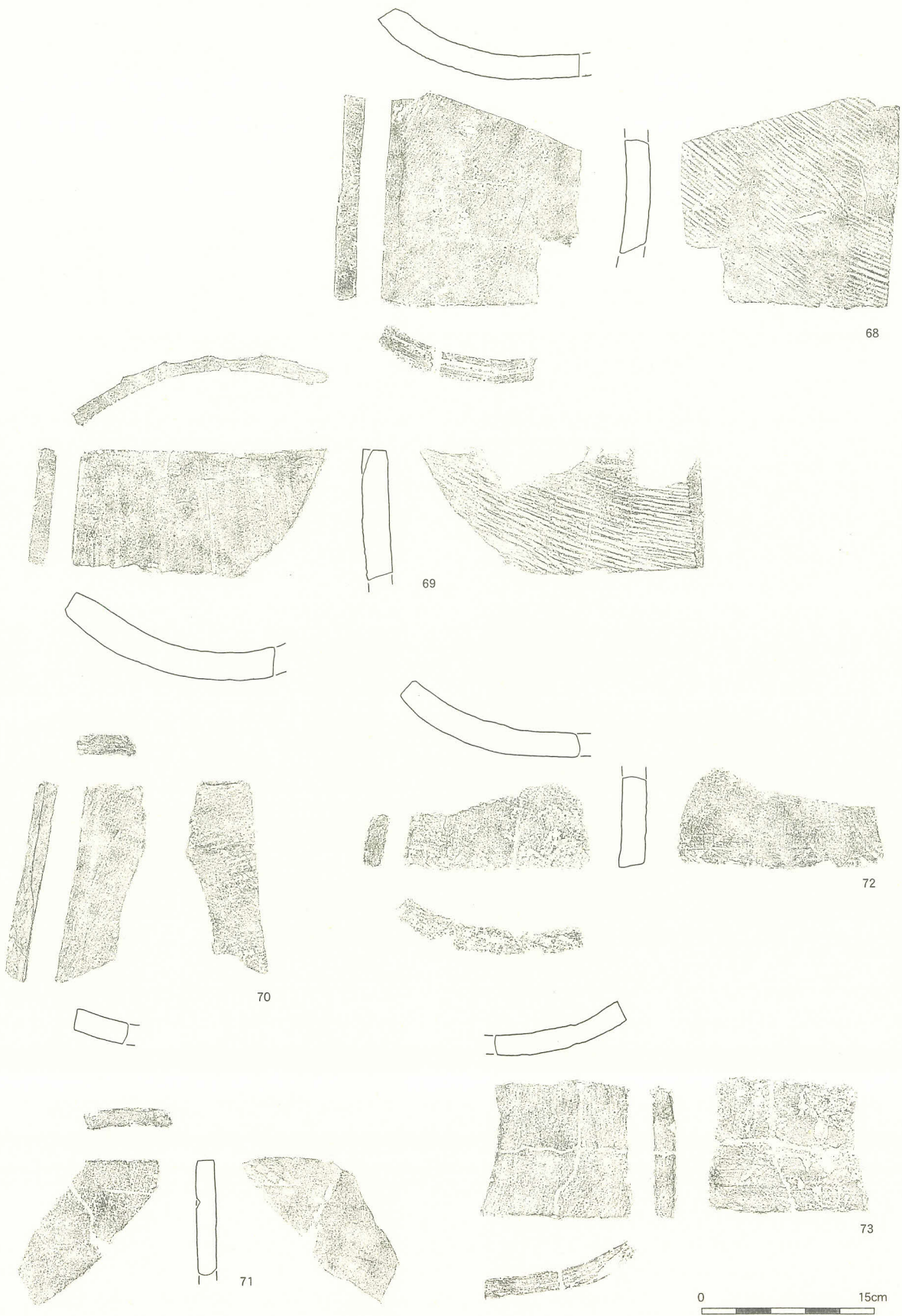
49、50は熨斗瓦。ともに凸面には強い横ナデを施し、凹面は49が布目をナデ消すが50は未調整である。側縁部はいずれも未調整。51は隅落とし平瓦。凸面には2cmあたり5本の平行叩きを施し、凹面は布目をナデ消す。側縁部は未調整。



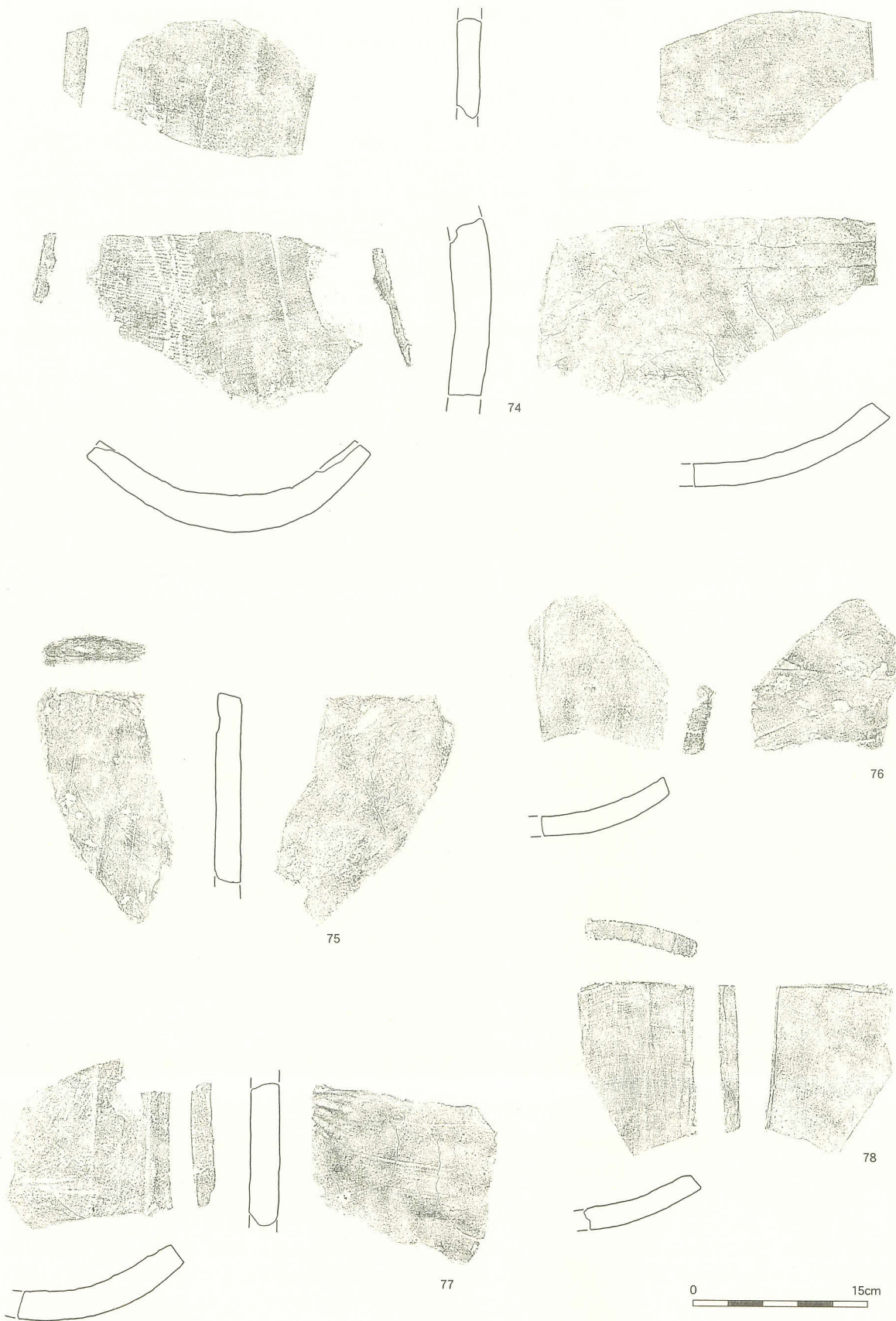
第16図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチS B 1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図4 (縮尺1/5)



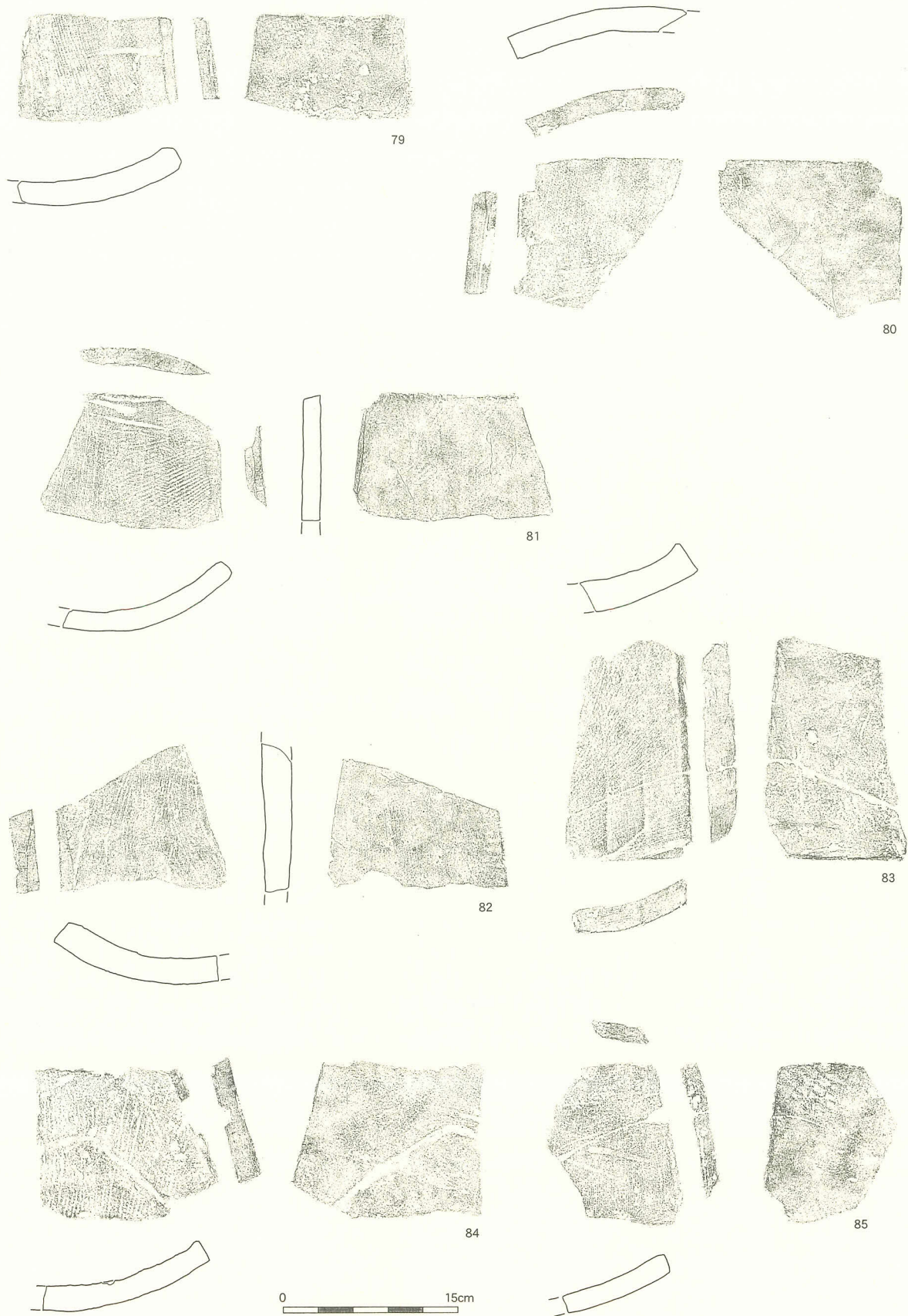
第17図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図5 (縮尺1/5)



第18図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図6 (縮尺1/5)



第19図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図7 (縮尺1/5)



第20図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図8 (縮尺1/5)

52～62 は丸瓦。52～56、58 は凸面に2cmあたり5～6本の平行叩きを施した後、横方向にナデ消す。凹面にはいずれも布目を残す。端部、側縁部は未調整であるが、56 に側縁凹面の面取りが見られる。57 は縄目叩きを施した後、横方向にナデ消す。凹面に布目を残す。側縁部は未調整。59～62 は総じて横ナデを施す。凹面の布目は61 が密。いずれも端部、側縁部は未調整である。

63～89 は平瓦。63～69、81 は凸面に2cmあたり4～5本の平行叩きを施す。65～67、81 は横方向に強くナデ消す。これらは凹面の布目をそのまま残すが、凸面の叩き目をナデ消さない63、64、68、69の内、63、68、69 は凹面は縦方向に布目を強くナデ消す。凸面の一部に赤彩顔料が付着する69 は側縁凸面を面取りするが、それ以外は未調整である。70、82、85 は凸面に斜格子叩きを施し、ほとんどが横方向に強くナデ消す。叩き目の単位は70、82 は縦0.3～0.4cm、横0.5cm、85 は縦0.5cm、横1.1cmである。凹面は布目を残し、82 に模骨痕が残る。端部、側縁部は未調整。71、72、80 には凸面に1単位が縦0.7～0.8cm、横1.1cmの正格子目を施すが、横ナデにより叩き目をナデ消す。凹面は布目を残し、端部、側縁部は未調整。73～75、77～79、83、84、86～89 は凸面を縦ないしは横方向に強いナデを施す。73、75、89 は凹面の布目を縦方向に強くナデ消す以外は模骨痕とともに布目を残す。端部、側縁部の調整を施さないものが多いが、78 は狭端凸面、側縁凹面、凸面を薄く面取りし、89 は側縁凸面を面取りする。



第21図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図9 (縮尺1/5)



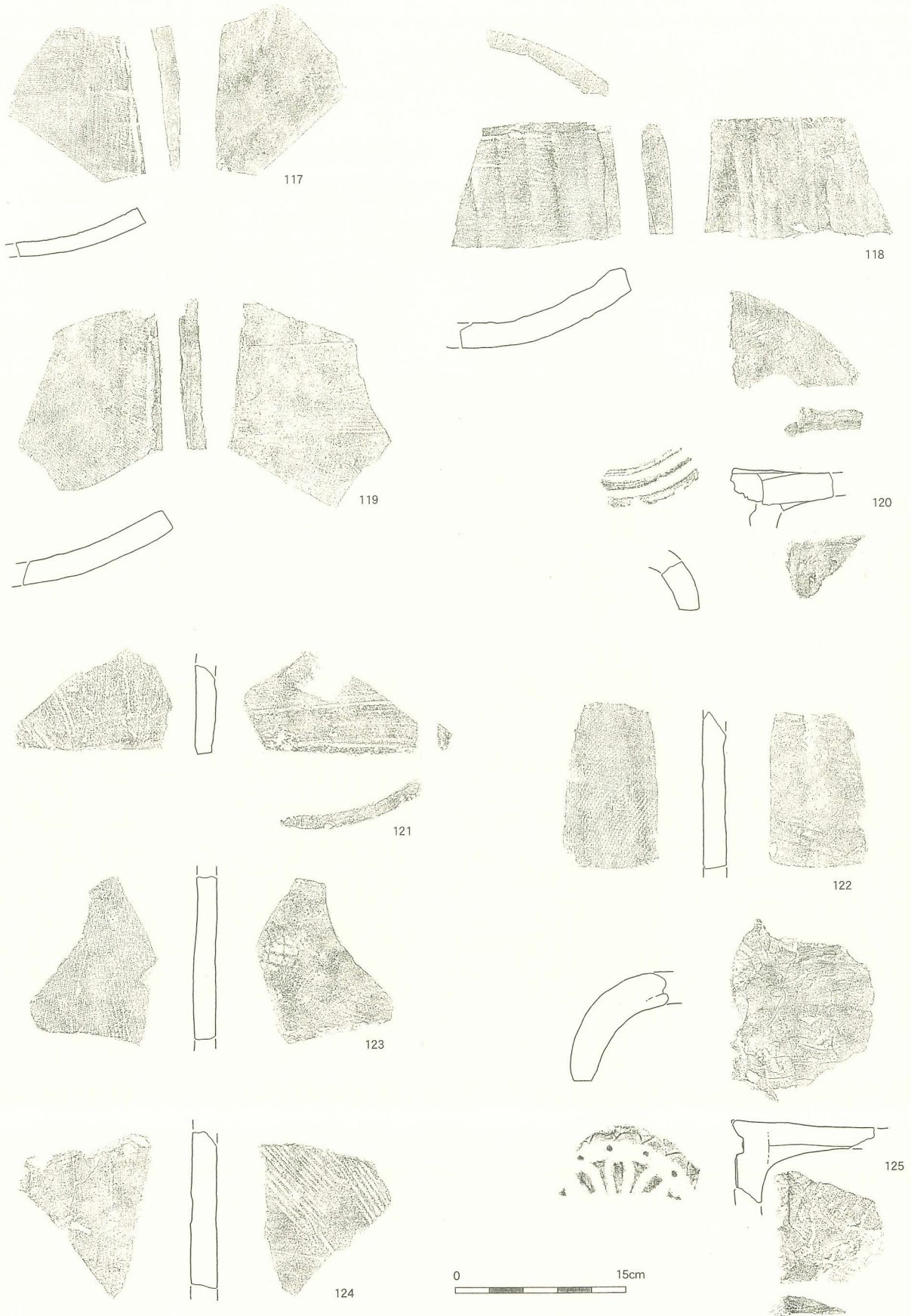
第 22 図 興道寺廃寺第 2 次調査 2 トレンチ SB 1 西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図 1 (縮尺 1/5)



第23図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)



第24図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図3 (縮尺1/5)



90~119 : SB1西辺瓦溜まり上層
 120~124 : SK3
 125 : 表土

第25図 興道寺廃寺第2次調査2トレンチSB1西辺瓦溜まり上層・SK3・表土出土瓦実測図(縮尺1/5)

90～94は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。90は瓦当復元径15.6cm、中房径4.6cm、外縁幅0.5～1.1cm、瓦当厚1.2cmを測る。蓮弁、間弁はやや扁平である。中房には径0.3cmほどの珠文を1+8に配する。瓦当裏面に不定方向のナデを施す。91は外縁幅1.6cmを測る。間弁に範傷が見られる。92は瓦当厚2.3cm、外縁幅1.0～1.6cmを測る。93は蓮弁に範傷が見られる。94は瓦当外縁。丸瓦広端面をそのまま外縁とするが、外縁幅は1.3cmと狭い。95は素弁九葉蓮華文軒丸瓦の外縁。外区外縁の内斜面に線鋸齒文を、外区内縁には径0.6cmの珠文を配する。96～98は軒丸瓦丸瓦部の瓦当との接合部。いずれも丸瓦広端面を削り調整する。丸瓦部凸面には強い横ナデを施し、凹面は布目を残す。99、100は三重弧文軒平瓦。瓦当復元厚はそれぞれ3.3cm、3.5cm。瓦当文様の断面形状は弧線が平坦、凹線は浅く狭いU字状を呈する。直線顎。ともに平瓦部凸面に1単位4枚からなる花卉型押し文が見られ、99は型押し文が重複する。凹面は99が強い縦ナデにより布目をナデ消すことに対して、100は未調整である。ともに広端凹面は0.5cm強の幅の狭い削りを第1弧線に沿って入れ、99は側縁凹面、凸面を面取りする。101、102は三重弧文軒平瓦。瓦当厚はともに2.9cm。瓦当文様の断面形状は弧線が鋭く、凹線は浅いU字状を呈する。平瓦部凸面はナデ調整し、広端凸面を第1弧線に沿って1.5cmほどの幅で強く面取りする。103は偏行唐草文軒平瓦。瓦当復元厚4.6cm。瓦当唐草文の支葉は内区上下界線から派生する。広端凸面に強い横ナデを施し、凹面には布目を残す。

104～112は丸瓦。104、112は凸面に2cmあたり6本の平行叩きを施した後、横方向に強くナデ消す。104の凹面には布綴じ合わせ目が残る。104は側縁凹面を面取りするが、112は未調整。105～111は凸面にナデ調整を施し、凹面に布目を残す。105は側縁凹面、凸面を面取りするが、106～108は側縁凹面のみに面取りを施す。113～119は平瓦。113は凸面に2cmあたり5本の平行叩きを施し、凹面は布目をナデ消す。端部、側縁部は未調整。114、116～118は凸面に斜格子叩きを施すが、いずれもナデ消す。叩き目の単位は、114は縦、横ともに1.1cm、116～118は縦0.4～0.5cm、横0.5～0.6cmである。114が凹面の布目をナデ消し、側縁部凹面、凸面を面取りする。116、118の凹面は模骨痕を残し、118は側縁凹面を面取りする。115は凸面に縄目叩きを施し、凹面に布目、模骨痕を残す。119の凸面は強い横ナデを施し、凹面の布目を縦方向に強くナデ消す。側縁部は未調整。

120は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当外縁幅2.0cmを測る。外縁は二重圈線からなり、外区内縁にわずかに段を持つ。丸瓦部の広端凹面を瓦当側面に接合する。丸瓦部凸面に強い横ナデを施す。

121～124は平瓦。121の凸面に強い横ナデを施す。凹面は布目を残す。端部、側縁部は未調整。122は凸面に1単位が縦0.5cm、横0.7cmの斜格子叩きを残す。123は凸面に1単位が縦0.7cm、横1.2cmの正格子叩きを施す。凹面はともに布目を残す。124は2cmあたり4本の平行叩きを施し、凹面の布目を縦方向に強くナデ消す。

125は瓦溜まり部分の表土から出土した素弁九葉蓮華文軒丸瓦。瓦当厚2.4cmを測る。蓮弁、間弁の肉厚が乏しい。外区外縁に線鋸齒文、外区内縁に珠文を巡らす。

第4項 3 トレンチ

基本層序

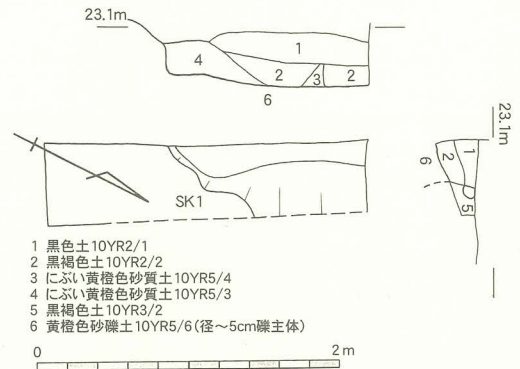
調査地は畑地であり、地表面の標高23.2～23.5m。耕作土となる黒褐色砂礫土（層厚0.4m）下、トレンチ北側では標高23.1mで地山同一レベルに至るが、トレンチの南側、東側ではさらに東に向けて地山面の標高が急激に低下するため、一部に地山層である明黄褐色土がブロック状に混じる黒褐色土を経て、22.3m付近において地山土、黄橙色砂礫土層上面へと至る。トレンチの北側では総じて攪乱を受けている。

遺構

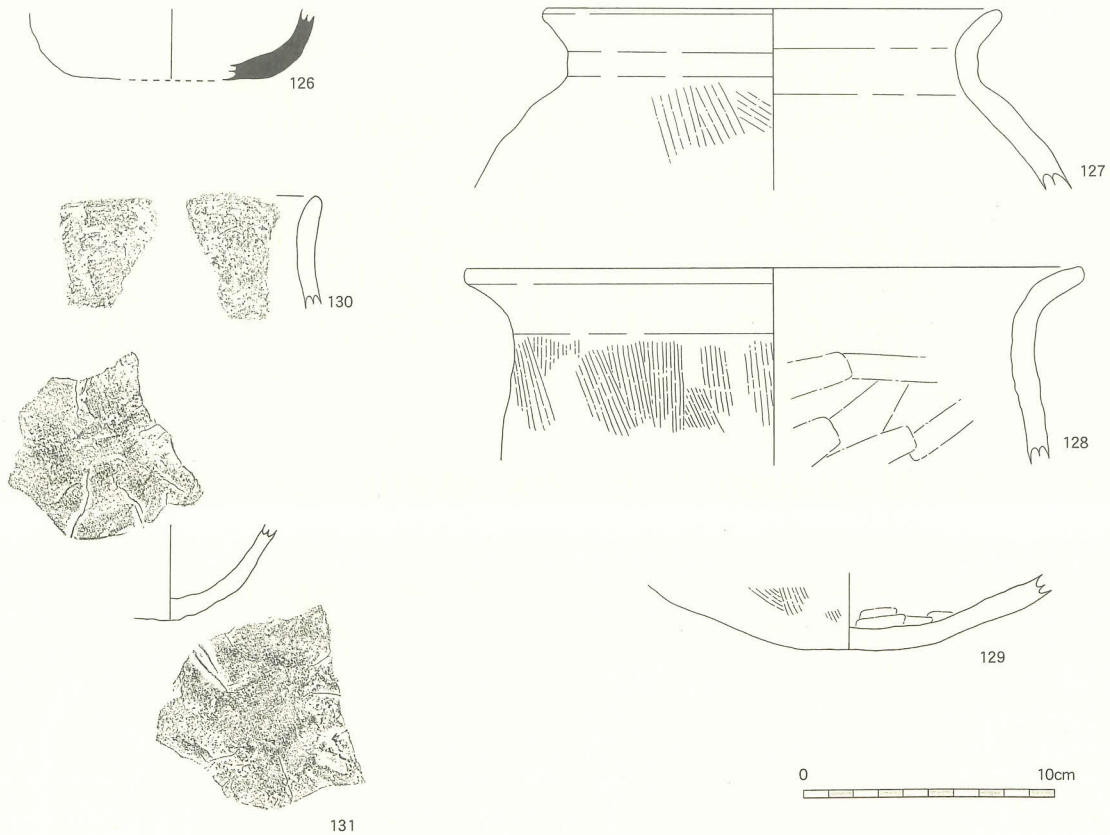
黄橙色砂礫土層上面において土坑1基（SK1）が検出されている。

土坑

土坑1（SK1）は南北検出長 0.48m、東西検出長 1.33m、検出面からの深さは 0.35m を測る。断面形状は比較的浅い平底となる。地山土であるにぶい黄橙色砂質土が大ブロック状に混じる黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋1点、杯A片1点（126）、杯B蓋1点、甕8点（127～129）、製塩土器18点（130・131）が破片で出土している。



第26図 興道寺廃寺第2次調査3トレンチSK1
平面図・土層断面図（縮尺1/50）



第27図 興道寺廃寺第2次調査3トレンチSK1出土土器実測図（縮尺1/3）

遺物

126は須恵器杯A。復元底径8.0cmを測り、焼成はやや甘い。127～129は土師器甕。127は復元口径17.8cmを測り、口縁部にナデ、外面は縦ハケを施す。内面はケズリを施したものと考えられる。口縁部は先端でわずかに外反する。胴部外面には煤が付着する。128は復元口径24.2cmを測り、口縁部にナデ、内面には斜め上方に向けたやや粗いケズリ、外面に縦ハケを施す。頸部から口縁部にかけて強く外反する。129は甕底部で内面にケズリ、外面に縦ハケを施す。130・131は製塩土器。130は口縁部であり、内面にナデの痕跡が残る。131は底部で内面に指圧痕やナデの痕跡が残る。須恵質である。

第6節 興道寺廃寺第3次調査

第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音30番地、35番地1、38番地。第2次調査3トレンチにおいて少量の瓦片を伴う東へ向けた旧地形の落ち込みが確認されたが、興道寺廃寺北方の様相は全く不明であったことから、寺域、伽藍域北側の様相確認を目的として休耕地に4箇所トレンチを設定。トレンチの規模は、1トレンチ南北6.1m、幅1.7m、2トレンチ南北5.9m、幅1.7m、3トレンチ南北15.2m、幅1.7m、4トレンチ東西5.2m、幅1.8m、計28㎡である。調査面積も乏しく、検出遺構も少ないことからトレンチをまたがって遺構種別ごとに連続した遺構番号を付した。

調査は平成16年1月26日から平成16年2月20日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

1月26日 調査機材搬入、調査区設定、表土掘削。1月27日 地山面にて人力精査に入る。2・4トレンチにて遺構確認。1月28日 1トレンチにて地山面の攪乱を確認。1月29日 調査図面作成に本格的に着手。1月30日 3トレンチにて遺構確認。2月2日 遺構検出状況写真撮影。水野和雄氏（県一乗谷朝倉氏遺跡資料館）来跡。2月5日 遺構掘削に着手。2月10日 全体写真撮影。2月12日 調査区一部埋め戻し。2月16日 地山面の再精査。水野和雄氏（県一乗谷朝倉氏遺跡資料館）来跡。2月18日 全体写真撮影。2月19日 調査区埋め戻し。2月20日 調査機材搬出。

第2項 1トレンチ

基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高23.6～23.7m。上層から耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.3m）、攪乱層となる黒褐色、褐色系の砂礫、粗砂（層厚0.3～0.5m）を経て、標高23.0～23.2mで地山土、黄褐色砂礫層上面へと至る。地山層は既に表層の粘土層が削平され、地山下位層となる砂礫土が露頭する。遺構、遺物ともに確認されていない。

第3項 2トレンチ

基本層序

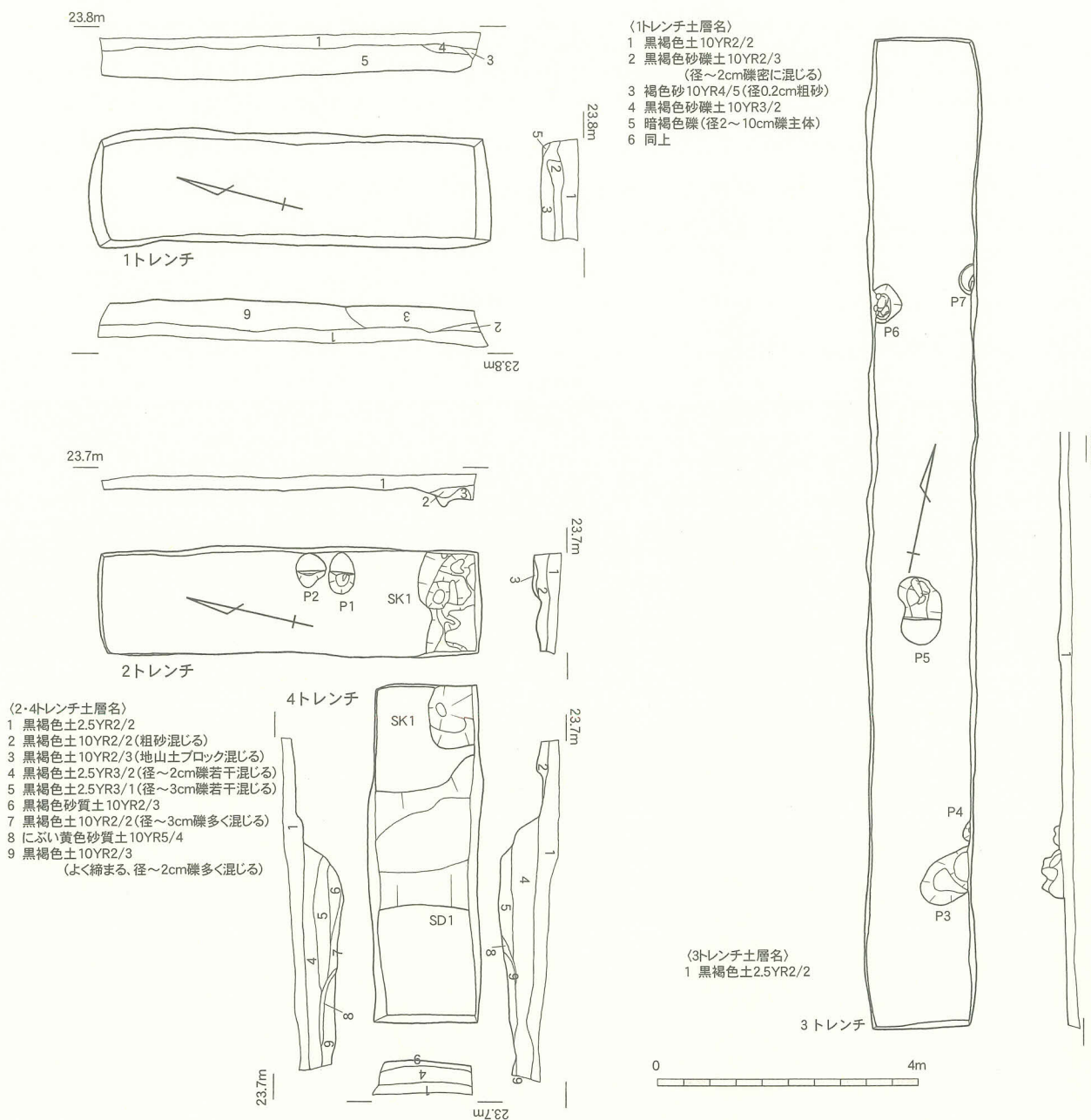
調査地は畑地であり、地表面の標高23.6m。耕作土となる黒褐色土（層厚0.2m）下、標高23.4mで地山土、明黄褐色粘質土層上面へと至る。

遺構

明黄褐色粘土層上面において土坑1基（SK1）、小穴2基（P1、P2）が検出されている。土坑は4トレンチにまたがるが、本節で併せて報告する。

土坑

土坑1（SK1）は平面形態が若干崩れた隅丸方形を呈し、東西検出長3.05m、南北検出長0.74m、

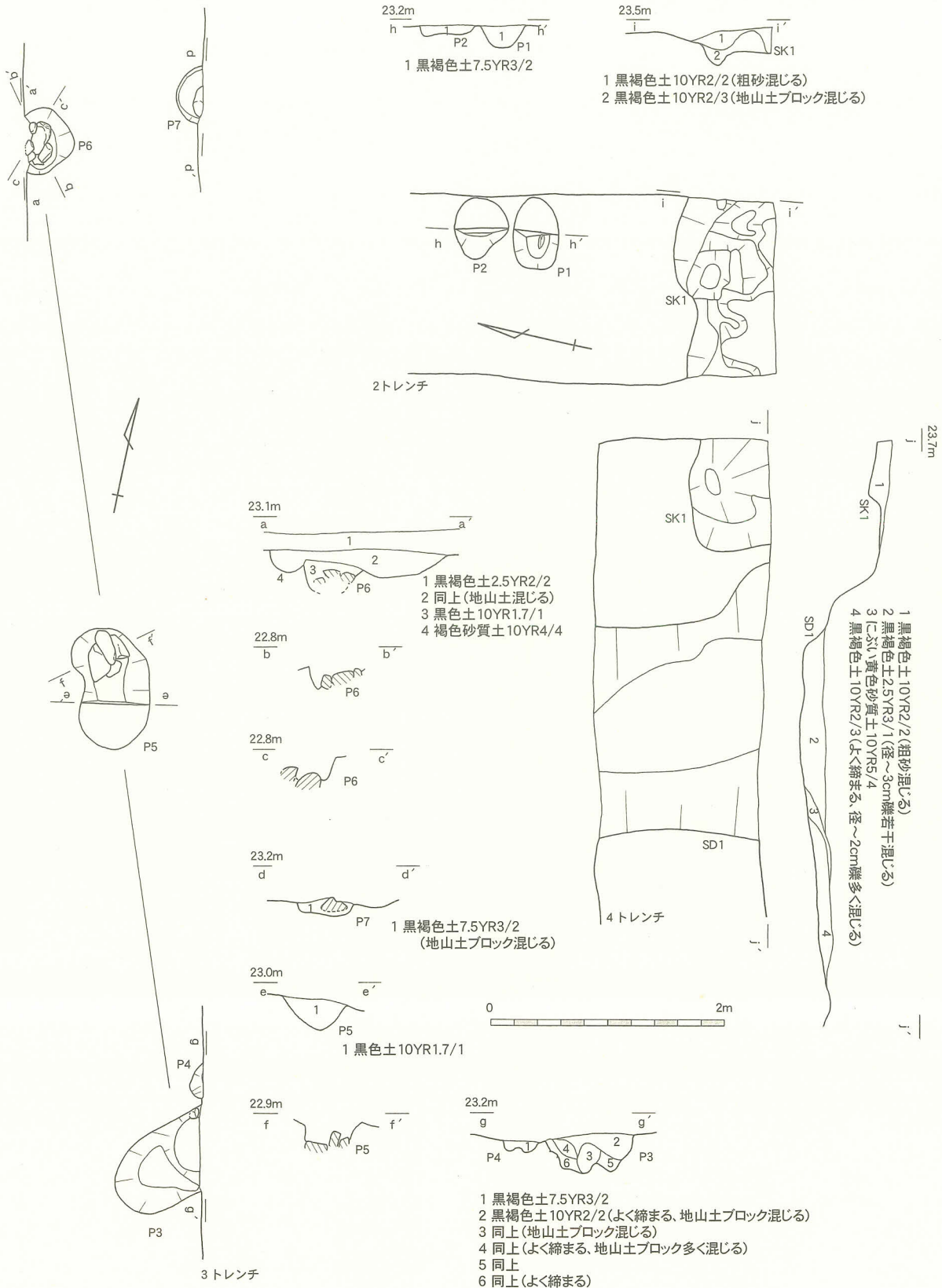


第28図 興道寺廃寺第3次調査1~4トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/100)

検出面からの深さ0.29mを測る。断面形状は部分的に不定形に深く落ち込む。埋土は粗砂が混じる黒褐色土を主体とし、下位に地山土ブロックが混じる。須恵器甕片2点、製塩土器片4点が出土。

小穴

小穴1(P1)は南北0.40m、東西0.62m、検出面からの深さ0.18mを測る。小穴2(P2)は南北0.46m、東西0.53m、検出面からの深さ0.08mを測る。ともに平面形態はやや崩れた円形を呈し、断面形状は小穴1が緩やかな弧状、小穴2は浅い平底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴1から製塩土器片1点が出土。



第29図 興道寺廃寺第3次調査2~4トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/50)

第4項 3トレンチ

基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高23.0～23.2m。耕作土となる黒褐色土（層厚0.2m）下、標高22.8～23.05mで地山土、明黄褐色粘質土層上面へと至る。この地山層は北に向けて微かに傾斜する。

遺構

明黄褐色粘土層上面において柱穴3基（P3、P5、P6）、小穴2基（P4、P7）が検出されている。

柱穴

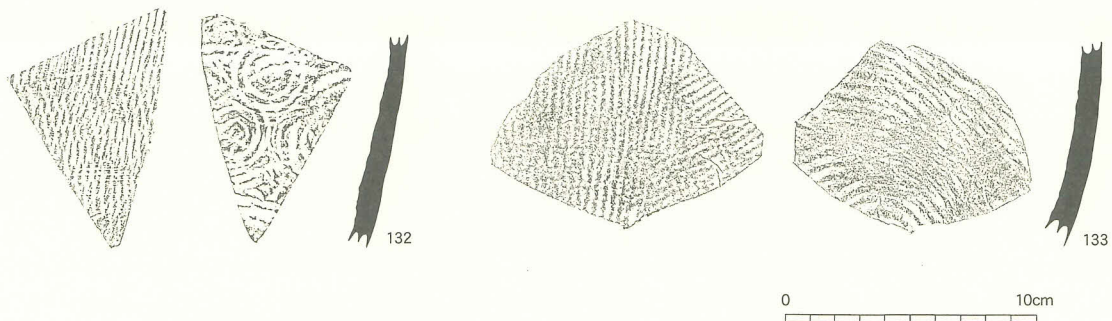
磁北から西偏して3mの間隔で3基の柱穴が南北に並び、掘立柱建物の一部を構成するものと思われる。柱穴1（P3）は南北0.81m、東西検出長0.71m、柱穴2（P5）は南北1.02m、東西0.60m、柱穴3（P6）は南北0.57m、東西検出長0.37mを測る。検出面からの深さはそれぞれ、0.33m、0.27m、0.19m。いずれも平面形態は長楕円形を呈するものと思われる。柱穴2、柱穴3の底部には建物礎石として長辺0.3m弱の自然瓦1、2石を、平坦面を上方に向けて配し、周囲を長辺0.2m前後の自然礫、拳大の礫、数点で根固めする。断面形状は弧状となるが、柱穴1底面は不定形であり、柱穴1においても礎石を有していたものと思われる。いずれも黒褐色土、あるいは黒色土を埋土に持つが、柱の痕跡は確認できない。柱穴1では礎石の抜き取りによるものか埋土の攪拌が認められる。柱穴1から土師器甕片2点が、柱穴2から須恵器甕片5点（132・133）、製塩土器片2点が、柱穴3からは須恵器甕片1点が出土。遺物の年代から律令期までは降らない遺構であるものと考えられる。

小穴

小穴1（P4）は南北0.30m、東西検出長0.12m、小穴2（P7）は南北0.50m、東西検出長0.23mを測る。検出面からの深さはそれぞれ0.08m、0.16mと浅い。ともに平面形態は円形を呈し、断面形状は浅い平底状。黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。埋土の特徴から柱穴3基と同時期と思われる。

遺物

132・133は須恵器甕胴部。内面に同心円状当て具痕、外面は平行文叩きが残る。132は叩きがやや交差し、内面当て具痕は同心円の目が細かい。これに対して133は叩きが交差するものの、内面同心円の目が粗い。ともに古墳時代後期の所産として捉える。



第30図 興道寺廃寺第3次調査3トレンチP5出土土器実測図（縮尺1/3）

第5項 4トレンチ

基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 23.3～23.6m。耕作土となる黒褐色土（層厚 0.1～0.3m）下、トレンチ東端では標高 23.35m付近で地山土、明黄褐色粘質土層へと至る。トレンチの西側では人為的な地山層の削平により地山面が標高 22.95m付近まで低下する。

遺構

明黄褐色粘土層上面において前述した土坑1基（SK1）、溝1基（SD1）が検出されている。

溝

溝1（SD1）は地山層の人為的削平により標高 23m付近に造られた平坦面から掘り込まれる。南北方向に延び、南北検出長 1.46m、最大幅 2.36m、検出面からの深さ 0.30mを測る。断面形状は浅く落ち込み、平底状となる。溝の東側は地山層削平による落ち込みからいったん、わずかに平坦面を造り、さらに浅く落ち込むことに対して溝の西側では地山層の上に小礫が混じる黒褐色土を 0.2m弱の厚さに積み、さらに黄色砂質土を薄くつき固めることで溝西側の立ち上がりを造り出す。埋土には黒褐色土が堆積するが、部分的に底面直上で礫が多く混じる。埋土から製塩土器片2点が出土。

第7節 興道寺廃寺第4次調査

第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音5番地、27番地1・2、6号淵ノ上8・9番地、16番地、7号砂河原9番地、32号東長5番地。第2次調査2トレンチで確認された基壇遺構1の西辺、南辺の様相確認とともに、寺域南方、北方の様相確認を目的として休耕地に10箇所のトレンチを設定。トレンチの規模は1トレンチ南北19.9m、幅2.2m、2トレンチ東西25.0m、幅1.8m、3トレンチ東西21.9m、幅1.7～1.9m、4トレンチ8.0m、幅2.0～2.1m、5トレンチ南北10.0m、東西8.0m、幅2.0m、6トレンチ10.0m、幅2.2m、7トレンチ東西13.4m、幅1.5m、8トレンチ南北8.1m、東西3.1m、9トレンチ東西4.2m、南北2.1m、10トレンチ東西15.1m、幅1.6m、調査面積は計251㎡である。

調査は平成16年6月21日から平成16年8月13日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

6月22日 調査区設定、表土掘削、水準点移設。6月23日 調査機材搬入。6月24日 6・7・9・10トレンチにて地山面の人力精査に着手。6月28日～ 5・8トレンチ地山面の人力精査。各トレンチにて遺構検出状況写真撮影、調査図面作成に着手。6月29日～ 4・5トレンチ地山面の人力精査。各トレンチにて遺構掘削に着手。7月2日 1～3トレンチ地山面の人力精査に入る。7月5日 各トレンチ遺構写真撮影。7月12日～ 各トレンチにて平断面図、出土状況図などの調査図面作成を本格的に進める。7月20日～ 各トレンチの全体写真撮影を随時進める。7月23日～ 7トレンチにて瓦溜まりを精査。7月26日～ 7トレンチ瓦溜まり写真撮影。8・9トレンチ埋め戻し。7月27日～ 調査図面作成を進める。8月6日 7トレンチ瓦溜まり出土遺物取り上げ。8月12日 調査機材搬出。8月13日 全トレンチ埋め戻し。

第2項 1トレンチ

基本層序

調査地は水田であり、地表面の標高 26.3m。上層から耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2～0.3m）、遺物包含層となる黒褐色土（層厚 0.2～0.3m）を経て、標高 25.9mで地山土、褐色粘質土層上面へと至る。地山面の傾斜はほとんど見られない。

遺構

褐色粘質土層において土坑3基（SK1～3）、小穴23基（P2～P12、P14～P25）、黒褐色土層上面において2基の小穴（P1、P13）が検出されている。

土坑

土坑1（SK1）は平面形態が楕円形を呈し、南北検出長0.68m、東西検出長0.95m、検出面からの深さは0.33mを測る。小穴6を切る。断面形状は弧状であるが、西側では尖底状となる。埋土として上層に黒褐色土、下層に焼土、炭が多量に混じるにぶい黄褐色土を持つ。土師器甕片4点（134）、製塩土器片7点が下層を中心に出土している。

土坑2（SK2）は平面形態が不定形を呈し、南北2.37m、東西検出長1.97m、検出面からの深さは0.21mを測る。小穴25に切られる。断面形状は鋭く浅く落ち込むが、平底状となる。西側では地山の一部を掘り残すことで土手状に高まりを残している。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋2点、赤彩土師器1点、土師器甕片14点、製塩土器片17点（135）が出土。

土坑3（SK3）は平面形態が崩れた円形を呈し、南北1.09m、東西1.03m、検出面からの深さ0.24mを測る。断面形状は播鉢状、底面が平底となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片1点が出土。

小穴

小穴1（P1）は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.26m、東西検出長0.25mを測る。トレンチ北壁土層断面で確認された深さは0.44mと深い。断面形状は箱型である。黒褐色土を埋土に持つが、木根状の攪乱が見られる。

小穴2（P2）は平面形態が楕円形を呈し、南北0.28m、東西0.21mを測る。小穴3を切る。検出面からの深さは0.06mと極めて浅い。断面形状は緩やかな弧状である。黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯B蓋片1点が出土。小穴3（P3）は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.14m、東西0.14mを測る。検出面からの深さは0.04mと極めて浅い。断面形状は緩やかな弧状である。黒褐色土を埋土に持つ。小穴4（P4）は平面形態が円形を呈し、径0.24m、検出面からの深さは0.20mを測る。小穴5を切る。断面形状は深い碗状となる。黒褐色土を埋土に持つ。律令期の須恵器壺片1点（136）が出土。小穴5（P5）は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.31m、東西0.29m、検出面からの深さ0.13mを測る。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴6（P6）は平面形態が崩れた円形を呈し、南北0.58m、東西検出長0.52m、検出面からの深さ0.32mを測る。断面形状は箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片2点、盤と思われる赤彩土師器片1点、製塩土器片4点が出土する。

小穴7（P7）は平面形態が崩れた円形を呈し、南北0.63m、東西0.68mを測る。小穴8を切る。検出面からの深さは0.12mと浅い。断面形状は中心に向かって段状に深くなる。焼土、炭を多量に含む黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片2点（137）、製塩土器片4点（138）が出土。

小穴8（P8）は平面形態が楕円形を呈し、南北0.44m、東西検出長0.28mを測る。検出面からの深さは0.05mと浅い。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片1点が出土。小穴9（P9）は平面形態が楕円形を呈し、南北0.54m、東西0.69m、検出面からの深さ0.29mを測る。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。黒褐色土を埋土に持つ。赤彩土師器片1点、製塩土器片4点が出土する。小穴10（P10）は平面形態が隅丸形状を呈し、南北0.49m、東西0.28mを測る。検出面からの深さは0.04mと極めて浅い。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。盤と思われる赤彩